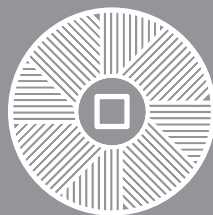
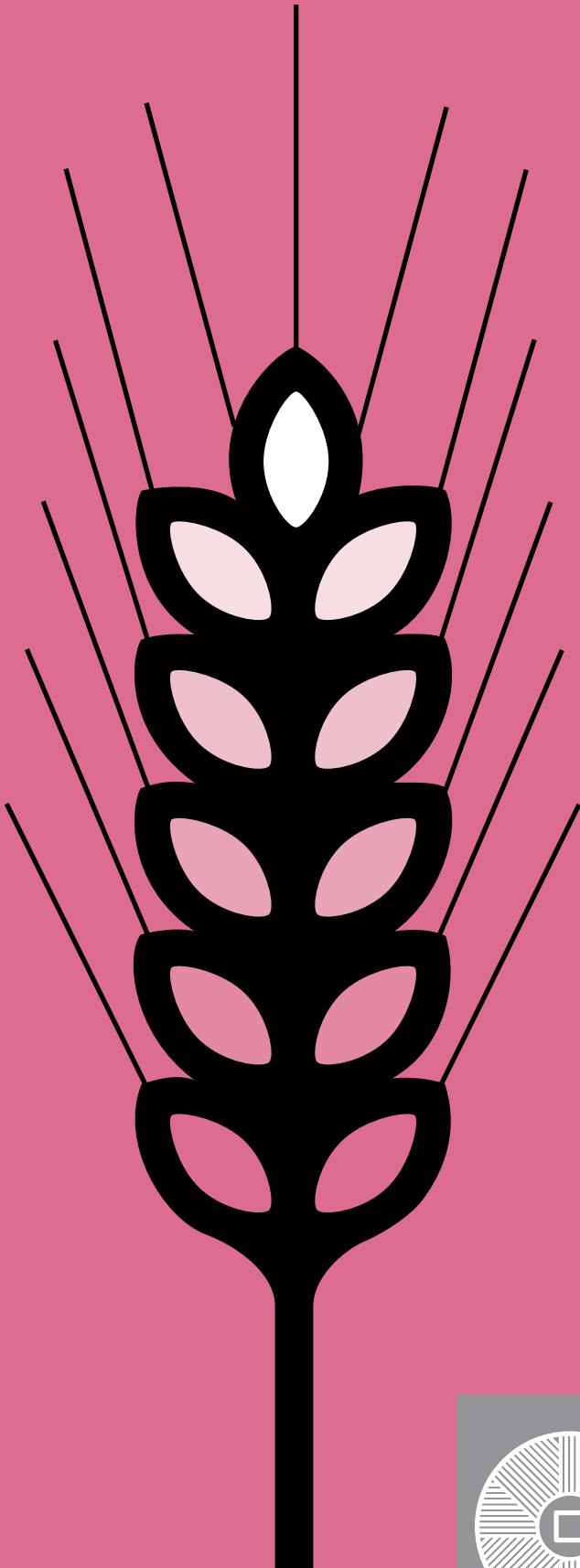


ISSN0913-8838

製粉 振興

2012
No.551
11



財団法人 製粉振興会

★目次

東アジア地域包括的経済連携(RCEP)に
ついて考える 3

「OECD-FAO農業見通し2012-2021」の
概要(穀物関係部分) 5

農林水産省農林水産政策研究所 上席主任研究官(食料・環境領域)

上 林 篤 幸

逼迫する世界の食糧と日本の食糧供給を考える 14

(株)資源・食糧問題研究所 代表

柴 田 明 夫

衣と泡 24

昭和学院短期大学学長 お茶の水女子大学名誉教授 畑 江 敬 子

小麦粉のある風景
簡単おいしい「復活レシピ」 26

食文家 ひらの あさか

世界の粉界展望 31

業界ニュース 28

国内資料 45

編集後記 54

東アジア地域包括的経済連携(RCEP)について考える

我が国においては「TPP(環太平洋パートナーシップ)協定」交渉参加をめぐる議論が行われてきているが、現時点では賛否両論が相容れず、政府がTPP交渉に参加する、参加しないを決断するに至っていない。そうした中、この10年間程様々な検討や構想が提案されてきたASEANを含む経済統合の動きが急速に進展し、8月にASEAN+FTAパートナー国経済大臣会合が開催された。同大臣会合において本年11月の東アジア首脳会議においてRCEPの交渉立ち上げのために必要な作業等について議論がされ、交渉立ち上げを首脳に提言するため「RCEP交渉の基本指針及び目的」が採択された。RCEPは東アジア地域包括的経済連携(Regional Comprehensive Economic Partnership)として昨年11月にASEANにより提唱された広域経済連携構想で、ASEAN10ヶ国及び日本、中国、韓国、豪州、ニュージーランド、インドの合計16ヶ国が構想に参加している。RCEPが実現すれば、人口で世界の約半分の約34億人、GDPで世界全体の約3割の約20兆ドル、貿易総額でも世界全体の約3割の約10兆ドルを占める広域経済圏が誕生することとなる。

RCEPについての具体的な内容の検討、交渉は今後となるが、TPP交渉が21分野を対象としているのに対して、3つの分野(物品貿易、サービス貿易、投資)の自由化を優先した経済連携協定である。また、日本は多くのRCEP対象国との自由貿易協定をすでに締結・交渉中であること、ASEANの開発途上国に配慮し、関税や投資規制は段階的に撤廃され、また一定の例外も認められると見られることから、比較的日本が受け入れやすい緩やかな自由貿易協定になると考えられている。日本としても平成22年11月、『包括的経済連携に関する基本方針』を閣議決定し、その中で「『国を開き』、「未来を拓く」ための固い決意を固め、これまでの姿勢から大きく踏み込み、世界の主要貿易国との間で、世界の潮流から見て遜色のない高いレベルの経済連携を進める。」としており、今後のRCEP交渉は流動的ではあるものの、スピード感を持って進むことも想定される。

そのような状況を踏まえ今後RCEP交渉が進んでいくに際して、製粉産業の視点から「国民主要食糧の安定供給」、「食料自給率を含めた国内産業の競争力確保」の2つは国民を守っていくために最低限考慮すべき事柄である。

1つ目の「国民主要食糧の安定供給」については、製粉産業の原料となる小麦はその9割近くが輸入小麦でまかなわれている。小麦は小麦粉に製粉され、その上

でパン、麺、菓子などに加工され、国民生活に欠かせない食料として必需品となっている。その原料である小麦の数量安定確保は食料安全保障面から最重要の課題となる。今般10月にはイタリア・ローマにおいて食料価格乱高下に関するFAO(国連食糧農業機関)主催の閣僚級会合が開催された。会合において日本として①食料安全保障の確保のため農業生産拡大の必要性、②食料価格乱高下防止に向けた市場の透明性の向上、③輸出規制など保護主義的な措置を控えることの重要性等を主張している。経済連携協定は域内の貿易自由化を推進していくものではあるものの、一方で域外の貿易に対しては保護主義的な色彩を強めるものとなる。今後、人口増加、新興国の経済発展などを背景に、今まで以上に食糧の争奪がはげしくなることも予想されており、RCEPをはじめとした経済連携協定締結により、輸出国との交渉力の低下、他の穀物主要輸入国との買い負けなど食料安全保障面での支障がないか検証を十分に行うことが重要である。

次に2つ目の「食料自給率を含めた国内産業の競争力確保」については、『包括的経済連携に関する基本方針』においても、「農業分野は貿易自由化により最も影響を受けやすい分野である」とされている。一方で我が国としては平成22年3月に決定された『食料・農業・農村基本計画』において、平成32年度の食料自給率目標を50%まで引き上げることが掲げられ、小麦は平成20年度の88万トンから180万トンに倍増するとされている。現実に食料自給率をここまで高められるかは大変にハードルが高いと言えるが、それにも増してRCEPを含めた貿易自由化が農業生産に与える影響はよく検証することが大切である。小麦生産への影響は、次の2つの点から検証することが求められる。第1に、交渉過程において原料小麦と小麦粉加工製品の国境措置の整合性が損なわれると、食品産業の国際競争力が失われ、結果として国内産小麦の需要自体が喪失し、小麦生産の維持も困難な状況となる。小麦は日本の農業において重要な役割を担っており、農業全体の弱体化につながる事となる。第2に、小麦生産に関する国境措置が低下すれば、さらなる財政負担が大きくなるため、国民生活へ多大な影響を及ぼす事となる。そうした複雑な連関を多面的に捉えて、農業、製粉産業、小麦関連産業と全体の枠組みとして競争力を維持し、国際競争に勝ち残っていくような仕組みの確保が大切となる。

RCEP交渉はこれらの事柄を改めて考える良い機会となる。政府は高いレベルの経済連携の推進と食料自給率の向上並びに国内農業・農村の振興を両立させるため、昨年10月に『我が国の食と農林漁業の再生のための基本方針・行動計画』を策定しているが、個別企業、あるいは個別産業などの影響にとどまらず、大局にたって国民生活、国内経済、産業、社会に与える影響をよく整理した上で、適切な判断が行われることが望まれる。

「OECD-FAO農業見通し2012-2021」の概要(穀物関係部分)

上 林 篤 幸

1. はじめに

去る7月11日に、「(OECD-FAO 農業見通し (Agricultural Outlook)2012-2021) (以下「見通し」と略。)が公表されました。OECD(経済協力開発機構)およびFAO(国連食糧農業機関)は、世界的に影響のある国際機関であり、その分析は、世界の政府関係者、経済界などから常に注目を集めています。

なお、本「見通し」においては、基準年度は2009-2011年度の3年度間の平均、予測期間は2012-2021年度であり、予測の最終年度は2021年度に設定されています。

本稿では、穀物に関連する部分に焦点を当ててその概要を紹介いたします。

2. マーケットの概要

2011年の記録的な豊作にかかわらず、穀物の国際価格は高い水準を維持した。豊作により、在庫が増え、2011年後半の国際価格はやや緩和したが、弱くなった米ドルと低い海上運賃による需要の増加により、2012年初期の輸出価格は再度強くなってきた。

穀物の国際価格はまた、ヨーロッパの大部分とCIS(旧ソ連諸国)を襲った強い寒波、および、米国西南部および南米の乾燥した気候により、さらに上昇した。2010年のトレンド値より低い米国のトウモロコシの単収により窮屈になったトウモロコシの供給と、南米における悪化した天候による思わしくない大豆の収穫が、トウモロコシの国際価格に更に上昇圧力を加えた。

2012年初期の報告では、米国の農民はトウモロコシを3,880万ヘクタール作付する意向であったが、これは、1937年以来の高い水準であった。しかし、市場の価格は、より油糧種子(大豆)を好む傾向を示したため、当初のトウモロコシの作付水準は減少し、代わって大豆の作付が増加した。トウモロコシの在庫が低い水準にあったため、マーケットはこれらの世界最大の生産国である米国のトウモロコシに対する作付の意向の進行に神経質な動きを示した。2011年後半のタイの洪水による大規模な被害にもかかわらず、タイ、インドおよびその他主要国のコメの単収は上昇し、2011年における世界のコメの生産量は増加した。近年のコメの国際価格は、タイおよびインドにおける新しい政策に大きく影響を受けた。

3. 「見通し」の要点

- (1) 2021年度まで、小麦の名目ベースでの国際価格は過去10年間を上回るが、過去2年間の高騰した水準よりは低下して推移すると見込まれる。小麦の実質ベースでみた国際価格は、2012年から緩やかに低下し、横ばいで推移するとみられる。粗粒穀物およびコメの国際価格も小麦と同様の傾向を示し、名目ベースでの国際価格は2012年度に低下し、その後緩やかな増加を示し、実質ベースでみた国際価格は下落傾向となると見込まれる。
- (2) 2012年度の世界の穀物生産量は高い国際価

格に反応して増加するものと見込まれる。その後、見通し期間中、緩やかに増加していくものとみられる。期末在庫率(期末在庫／消費量)は、見通し期間中歴史的な低水準にとどまると見込まれ、潜在的な価格変動の可能性は強まるとみられる。

- (3) 穀物の収穫面積は今後も増加すると見込まれるが、その増加ペースは過去10年間より鈍化するとみられる。単収の増加速度は、収穫面積の増加速度よりさらに悲観的であり、トウモロコシおよびコメを中心として、単収が今後もわずかな増加を示すと見込まれる。
- (4) 小麦および粗粒穀物の貿易量は、過去より遅い速度で増加するとみられる。米国は、トウモロコシの世界最大の輸出国としての地位を維持すると見込まれる。CIS(旧ソ連諸国)は、基準年度に比較して2021年度までに小麦の輸出量を大幅に増加させるとみられる。コメの貿易量は、アジアの開発

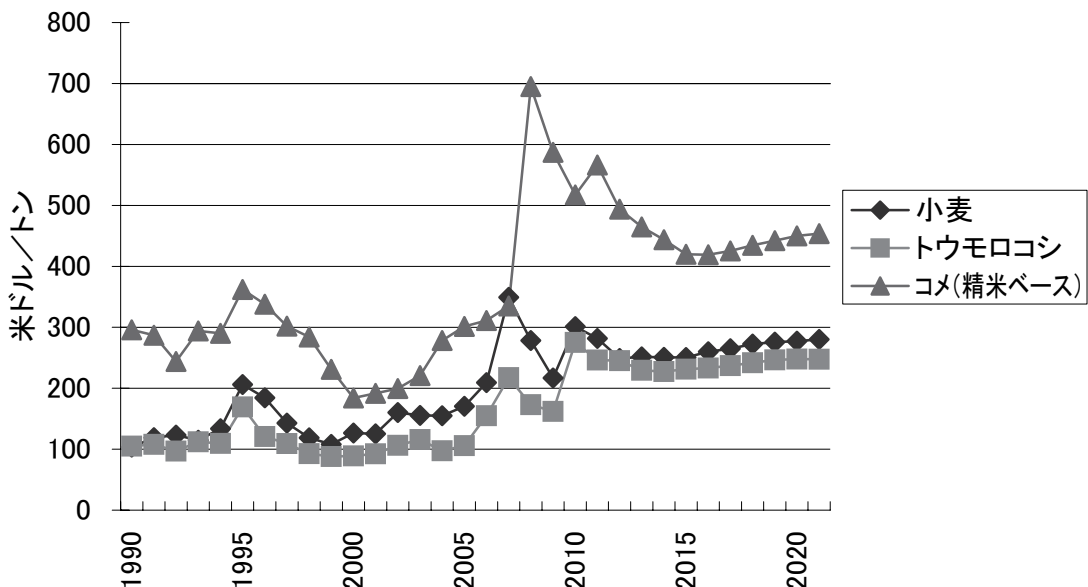
途上国、特にカンボジアとミャンマーからの輸出が増加し、またアフリカ諸国が輸入を増加させることにより、過去を上回る速度での輸出量の増加が見込まれる。しかし、それにもかかわらず、コメの世界の貿易量が世界の消費量に占める割合は、他の穀物に比較して小さいものとみられる。

4. 市場の動向と見通し

(1) 穀物の国際価格(図1)

小麦の国際価格の指標としての米国の輸出価格は、2011年度(6月から翌年5月まで)は279ドル／トンと見込まれ、高かった2010年度(301ドル／トン)よりは低下するとみられるが、これは価格の上昇により2011年度の世界の小麦生産量が増加すると見込まれることによるものである。粗粒穀物の国際価格の指標としての米国のトウモロコシの輸出価格も2011年度は低下(246ドル／トン)が予測されるが、低下の割合は

図1 穀物等の国際価格の予測



資料：「OECD-FAO Agricultural Outlook 2012-2021」

小麦に比較して緩やかである。2012年度については、小麦の国際価格はさらに低下すると見込まれるが(248ドル/トン)、これは歴史的に見れば高めの水準であり、その理由は、生産資材、特に北海ブレント原油価格が1バレル当たり110ドルという高い水準を予測していることによるものである。この生産資材の高い価格による2012年度の高めの価格予測は、粗粒穀物についても同様であり、2012年度のトウモロコシの国際価格は245ドル/トンと予測されている。この結果、同年度の小麦のトウモロコシに対する国際価格の価格比は歴史的に低い1.01-1.02という水準になると見込まれる。

2021年度にかけて、小麦の国際価格は名目ベースで279ドル/トンに近づくとみられる。これは、年率1.5%の増加である。この増加の背景には、強含みのエネルギー価格と、高水準での推移が見込まれる粗粒穀物市場からの影響があると考えられる。小麦の国際価格は、予測期間中は過去10年間で約15%上回る水準を達成するとみられる。しかし、インフレ率を勘案した実質ベースでは、小麦の実質価格は過去10年間と同じ水準で推移すると見込まれる。

小麦と同様に、粗粒穀物の国際価格も、名目ベースでは増加、実質ベースでは横ばいが予測される。トウモロコシの名目ベースでの国際価格は、2021年度に246ドル/トンに達するとみられる。しかし、実質ベースでは、国際価格は横ばいになると見込まれる。これらの予測結果から予期される穀物の国際価格の今後の傾向は、トウモロコシに対する小麦の国際価格の価格比の縮小傾向である。過去10年間はこれらの価格比は1.4であったものが、2021年度までには1.2に縮まると予測される。この価格比縮小の主な原因は、小麦に比較してトウモロコシの需給バランスが窮屈であることである。この背

景には、小麦が主に食用の需要であるのに対し、トウモロコシは飼料用、さらには近年ではバイオ燃料用の需要が増加していることによる。

2011年にコメの国際価格はタイ政府の新たな支持政策により、大幅に上昇した。そして、その後、安価なインドのコメが国際市場に戻るにより、急速に下落した。コメの国際価格は実質ベースで低下することが予測されているが、それは、南西アジアのコメの輸出国が十分な供給を有しており、また、同じくアジアのコメ輸入国がコメ自給政策を推進していることによる。コメの国際価格のトウモロコシの国際価格に対する比率は、過去10年間の平均である2.5より低い1.8に低下すると予測されるが、小麦に対する比率は、過去10年間の平均である1.8からやや下がって1.6で推移すると見込まれる。名目ベースでのコメの国際価格は、2021年度には454ドル/トンに下落するとみられる。

(2) 穀物の生産量(表1)

世界の小麦の生産量は、2021年度には、基準年度の2009-2011年度平均に比較して12%増加し、7億6,100万トンに達すると見込まれる。しかしながら、この増加の速度は、過去10年に比較して鈍化するとみられる。小麦の収穫面積は、基準年度に比較して3%増加すると見込まれる。収穫面積の増加が大きいのは、ロシア、ウクライナおよびカザフスタンにおいてであるとみられる。単収の増加速度は、年率0.7%と予測されるが、これは過去の増加速度の実績より減速している。それは、栽培面積が増加する上記の地域の平均単収が低いことにもよる。どのようにして生産性を向上させるかは、今後の世界農業にとって核心的な重要性を有する。

予測期間中の初期において、小麦の在庫量は十分であり、過去5年間の平均を上回り、予測

期間中徐々に増加し、2021年度には2億1,900万トンに達すると見込まれる。これらの基準年に対する在庫の増加は、CIS(旧ソ連諸国)において発生するとみられる。この2021年度の在庫水準において、小麦の主要輸出国の国内消費量に対する在庫量の水準は32%に達し、基準年度より僅かに低いが、2007-2008年度の世界食料危機の際の水準より10パーセンテージポイント高い。同様に、主要輸出国における小麦の「在庫&需要比率」(注：(在庫量)／(国内消費量+輸出量))で定義される)は21%に近づくと見込まれる。

世界の粗粒穀物の生産量は2021年度には13億6,500万トンに達するとみられる。これは基準年度より20%の増加である。アルゼンチン、ブラジル、中国、ロシア、ウクライナおよび米国において顕著な増加が見込まれる。粗粒穀物の収穫面積は、基準年度に比較して7%という、他の穀物に比較して顕著な増加が予測される。顕著な増加が予測される国々は、ブラジル、アルゼンチン、カナダおよびサブサハラアフリカ諸国である。粗粒穀物の単収は年率0.9%での増加が見込まれるが、これは過去のトレンドに比較してやや低い水準である。

粗粒穀物の期末在庫量は、基準年度の2億500万トンという危機的に低い水準から12%増加すると見込まれる。この増加の大部分が米国とブラジルにおいて生じるとみられる。粗粒穀物の主要輸出国における期末在庫率(期末在庫量／国内消費量)はわずかに回復し、2021年度には16%になると見込まれる。より重要な指標である、主要輸出国における粗粒穀物の「在庫&需要比率」(注：((在庫量)／(国内消費量+輸出量))で定義される)は予測期間中13%にとどまるとみられる。

2021年度には、世界のコメの生産量は5億4,200万トンに達し、基準年度より7,300万トン増加が見込まれる。生産量の年率増加率は1.2%と予測され、過去10年間の年率増加率の2.5%よりかなり低い。コメの収穫面積は予測期間中ほとんど変化がないと予測されるため、単収の増加率(年率1.2%)によって生産量の増加のほとんどが説明できる。生産量の増加は、ほぼその全てが開発途上国、すなわち、インド、カンボジア、ミャンマーおよびアフリカ諸国において発生すると見込まれる。大生産国である中国では、国内需要の減少に反応し、また、農地

表-1 世界の穀物の生産量の見通し

				基準年 2009-11年度 平均	目標年 2021年度	増減率 (%)
				(A)	(B)	(B)/(A)
小麦	世界全体	収穫面積	億ha	2.21	2.27	2.7
		単収	t/ha	3.06	3.35	9.4
		生産量	億トン	6.77	7.61	12.4
粗粒穀物	世界全体	収穫面積	億ha	3.22	3.44	6.8
		単収	t/ha	3.52	3.97	12.6
		生産量	億トン	11.34	13.65	20.3
コメ (精米ベース)	世界全体	収穫面積	億ha	1.61	1.66	2.7
		単収	t/ha	2.91	3.27	12.6
		生産量	億トン	4.69	5.42	15.6

や農業用水が宅地など他の用途の土地や生活・工業用水と競合することにより、2021年度には基準年度に比較してコメの生産量が600万トン減少するとみられる。先進国におけるコメの生産量は予測期間中年率0.3%で増加すると見込まれる。日本と韓国におけるコメの生産量は今後も減少傾向で推移するとみられ、EU(欧州連合)では、コメの生産量は基準年と同程度(170万トン)で推移すると見込まれる。もし降雨パターンがより好ましいものになれば、オーストラリアにおけるコメの生産は回復するとみられる。米国では、1.3%という着実な生産量の増加が予測されている。

世界のコメの期末在庫量は、2008年度以来急速に増加しているが、これは、生産量が急速に増加していることおよび、いくつかのアジア諸国の政府において、コメの公的流通を担保するために政府在庫を積み増ししていることによる。本「見通し」によれば、予測期間中、2013年度に1億5,700万トンに達し、その後はゆるやかに

減少し、2021年度には1億4,500万トンに達すると見込まれる。この背景には、中国およびインドが近年非常に高水準の在庫を維持していることがあげられる。主要輸出国における期末在庫率および「在庫&需要比率」は、予測期間中を通じて低下することが予測される。

(3) 穀物の消費量(表2)

小麦の消費量は、2021年度には7億5,900万トンに達すると見込まれる。小麦は基本的には食用穀物としての地位にとどまり、2021年度において世界全体での総消費量の約67%が食用として消費されるが、この水準は現在より2ポイント下がった水準である。世界平均での1人1年当たり年間消費量は65キログラム周辺の水準で大きな変化はないとみられる。世界全体での小麦の飼料用消費量は、2021年度には1億5,400万トンに達すると見込まれる。今後10年間の飼料用消費量の増加速度は、過去に比較するとやや減速し、2021年度には世界全体での小麦の総消費

表-2 世界の穀物の消費量の見通し

				基準年 2009-11年度 平均 (A)	目標年 2021年度 (B)	増減率 (%) (B)/(A)
小麦	世界全体	飼料用	百万トン	128	154	20
		食料用	〃	463	506	9
		バイオ燃料用	〃	6	16	149
		その他用	〃	71	83	16
		消費量合計	〃	668	759	14
粗粒穀物	世界全体	飼料用	百万トン	601	722	20
		食料用	〃	206	243	18
		バイオ燃料用	〃	138	185	34
		その他用	〃	160	163	2
		消費量合計	〃	1,143	1,356	19
コメ (精米ベース)	世界全体	飼料用	百万トン	16	20	29
		食料用	〃	391	463	18
		消費量合計	〃	460	542	18

量の20%を占めるとみられる(先進国では37%、開発途上国では10%)。先進国における小麦のバイオ燃料原料用としての消費は増加し、基準年度では世界全体の総消費量の0.09%から2021年度には2.1%に達すると見込まれる。このような、年率7%という急速な増加の大部分は、EUにおける小麦由来のエタノールの生産量の増加によるものであり、EUにおけるバイオ燃料用小麦の消費量の世界全体のバイオ燃料用小麦消費量に占める割合は、基準年度の68%から増加し、2021年度には約83%に達するとみられる。

世界の粗粒穀物の消費量は、2021年度には基準年度に比較して19%増加し、13億5,600万トンに達すると見込まれる。その増加の大半は飼料用およびバイオ燃料原料用である。予想される今後10年間の消費量の年率増加率(1.5%)は、過去10年間に観察された年率増加率(2.7%)より少ない。粗粒穀物の食用消費量は、2021年度には基準年度より18%増加して2億4,300万トンに達し、人口1人当たり食用消費量は僅かに増加して2021年度には約31キログラムに達するとみられる。粗粒穀物の飼料用消費量は、2021年度には基準年度より20%増加し、7億2,200万トンに達すると見込まれる。増加量の多い国は、ロシア(58%)、中国(47%)および米国(24%)であるとみられる。粗粒穀物の工業用消費量は、バイオエタノールの燃料への混合指令を反映して、米国においてトウモロコシ由来のバイオエタノールの生産量が2015年度まで増加し、その後は予測年度の終わりにかけて僅かに減少することから、米国の粗粒穀物の工業用消費量も同様の経路をたどると見込まれる。この経路は、米国のバイオ燃料政策のいかににかかっていることから、不確実要因を有する。世界全体でのバイオ燃料原料用の粗粒穀物の消費量は今後も

増加し、2021年度には基準年度より34%多い1億8,500万トンに達し、世界全体の粗粒穀物の生産量の13.5%を占めるようになる見込まれる。このうち、米国では、2021年度には、トウモロコシの国内生産量の38.6%がバイオエタノールの生産に向けられるようになる見込まれる。

世界のコメの消費量は、主に食用であるが、基準年度の4億6,000万トンから増加し、2021年度には5億4,200万トンに達するとみられる。なお、2021年度の消費量の85%が食用消費量である。消費量の増加は、主に人口の増加に牽引されるものであり、コメの人口1人当たり食用消費量は、基準年度の56.7キログラムから僅かに増加して、2021年度には59.9キログラムに達すると見込まれる。食用を含む総消費量の予測期間中の年率増加率は1.2%であり、過去10年間平均の年率1.7%よりは減速するとみられる。

コメの消費量の傾向は地域によって異なっている。東南アジアでは、コメは主食として消費されているが、人口の増加と活力ある経済の成長により、コメの消費量は今後10年間で年率2.5%の増加と、過去10年間の年率1.1%を上回る増加を示すと見込まれる。アフリカにおいてもコメの消費量は顕著な増加を示し、2021年度には基準年度から52%増加するとみられる。これは、年率に換算すると、3.7%の増加率となる。その背景には、強い人口の増加と、調理の簡単なコメをより好むようになる食生活の変化が存在する。一方、中国では傾向が異なっており、コメの総消費量および人口1人当たり消費量の両方とも減少すると見込まれる。先進国のコメ消費量は年率0.5%で増加し、2021年度には2,000万トンに達するとみられる。この消費量は世界全体の消費量の僅か4%であり、先進国のコメ消費量が世界全体のコメ消費量に占める割合は今後も小さいものになると見込まれる。

(4) 穀物の貿易量(表3)

世界の小麦および粗粒穀物の貿易量は、基準年度より4,700万トン(19%)増加し、2021年度には2億9,900万トンに達すると見込まれる。小麦の貿易量は、2021年度には基準年度より17%増加し、1億5,300万トンに達するとみられる。このような小麦の貿易量の増加の背景には、CIS(旧ソ連諸国)における食用小麦の輸出量の増加と、飼料穀物の不足による飼料用小麦輸入需要の増加が存在する。見通し期間中大きな輸入量の増加があると見込まれる国々は、中国、EU、インドネシアおよびイランである。粗粒穀物の貿易量は、2021年度には基準年度より20%増加し、1億4,600万トンに達すると見込まれる。米国が第1位のシェア(43%)にとどまるとみられるが、ロシアもシェアを増加させるとみられる(17%)。カザフスタンも小麦の輸出シェアを増加させると見込まれるが、インフラ基盤整備などで遅れをとっている面もあることから、その潜在能力を十分発揮するには到らないとみられる。

伝統的に、ロシア、カザフスタン、ウズベキスタンなどの黒海沿岸諸国は、気候の変化により穀物の生産量の変動が激しい地域であり、これらの国々の世界の穀物の貿易市場におけるプレゼンスが高くなることにより、穀物の国際価格の変動が高まる可能性がある。

コメの貿易量は、基準年度の3,300万トンか

ら年率1.9%で増加し、2021年度には4,300万トンに達すると見込まれる。この間のコメの貿易量の増加は、国内の生産量の増加が増大する国内需要を満たすことができないアフリカ諸国がコメの輸入量を増加させることによるものとみられる。コメの大輸入国のなかでは、フィリピンが国内生産を振興する政策を推進する結果、2021年度までの間にコメの輸入量を21%減らすと見込まれる。ベトナムは、タイを追い抜き、2021年度までには世界最大のコメ輸出国になるとみられる。インドのコメの輸出量は予測期間中500万トンを保つと見込まれる。その他のアジア諸国では、特にミャンマーとカンボディアをひとつの地域として見ると、これは世界の一大コメ輸出地域となり、2021年度にかけて輸出量を年率12%という早い速度で増加させるとみられる。

米国のコメ輸出量は着実に年率2.5%の速度で増加すると見込まれる。EUのコメ生産量は停滞し、EBA(Everything But Arms=後発開発途上国からの武器以外の品目の輸入に対しては関税をゼロに設定する措置)のもとで後発開発途上国からのコメ輸入量が増加するとみられる。日本と韓国のコメ輸入量については、WTO(世界貿易機関)における最小輸入量枠を反映して、予測期間中一定の水準を維持すると見込まれる。

表-3 世界の穀物の貿易量の見通し

			基準年 2009-11年度 平均	目標年 2021年度	増減率 (%)
			(A)	(B)	(B)/(A)
世界全体	小麦	百万トン	130	153	17
	粗粒穀物	〃	122	146	20
	コメ(精米ベース)	〃	33	43	30

注：貿易量=輸出量として集計したものである。

5. 重要な問題および不確実性

もし天候が順調に推移し、平均的な単収を達成することができれば、見通し期間中のはじめに世界の穀物の在庫量は増加すると見込まれるが、全体として見通し期間中の在庫量は、過去と比較して低い水準にとどまるとみられる。このようななかで、もし急激な予測しない生産量の減少が発生すれば、穀物の国際価格の変動傾向は強まると考えられる。

もう一つの重要な不確実性は、個々の年におけるそれぞれの作物の生産量の決定である。個々の作物の価格が高止まりになっており、作物間の土地を巡る競合が激しくなっていることから、例えば、米国におけるトウモロコシと大豆のように、生産者の作付決定により予測不可能な生産量の変化が生じる可能性がある。

原油価格の設定も、これがバイオ燃料を利用する経済的インセンティブに影響を与えることから、予測における重要な前提である。原油価格の設定については、今年の「見通し」においては、それが年々徐々に増加し、予測期間最終年度には1バレル当たり140ドルに達するという仮定を置いている。この原油価格の増加により、特にバイオエタノールの原料となるトウモロコシと砂糖の価格が上支えされる。また、過去と比較して、これらの価格の動きが原油価格の動きと相関を強める可能性がある。

政策の変化も引き続き重要な不確実性の発生源である。例えば、米国、EU、ブラジルにおけるバイオ燃料政策の大きな変化がもし起これば、それは穀物の国際市場、特にトウモロコシの国際価格に影響を及ぼすだろう。また、近年小麦およびコメにおいて経験したように、いくつかの輸出国が天候不順を理由とした輸出規制に走るようなことがあれば、穀物の国際市場は大きな影響を受けるだろう。

6. 「見通し」読後の所感

本年の「見通し」の「穀物」関連部分も、昨年「見通し」と同様、それ以前の「見通し」に比較して、分量をコンパクトにする作業がなされており、属性(つまり、国際価格、生産量、消費量および貿易量)毎に、先進国(つまりOECD加盟国)と開発途上国を対比して記述することに分析の重点が置かれている。このスタイルは昨年以來定着した感がある。

本年の「見通し」は例年よりやや遅れ、7月11日に公表されたが、このタイミングはちょうど米国において高温・干ばつによりトウモロコシや大豆の価格が急騰を開始した時期であった。すなわち、「天候が平常であれば」とする「見通し」の前提は、早くもその初年度で崩れたわけである。7月16日、米国海洋大気局(NOAA)は、米国が6月に過去56年間で最も広範囲にわたって干ばつに見舞われたと発表した。トウモロコシおよび大豆の国際価格は急騰を開始し、トウモロコシは8月に、そして大豆は9月に、それぞれの国際価格の過去最高値を更新した。ただし、トウモロコシおよび大豆は秋の収穫期に入り、さらに上値を追う様相はみられないものの、下落するわけでもなく11月13日現在で、穀物および大豆のシカゴ先物市場価格はほぼ高止まりした水準にある。この高温干ばつの影響は、当初懸念されたほどの規模のものでないことが既に判明している。すなわち、USDA(米国農務省)の最新の発表によれば、米国産トウモロコシの2012/13年度生産量の対前年減少率は、11月9日発表の需給報告(WASDE)によれば、▲13%であるが、これは「思ったほど干ばつの被害は深刻でなさそう」であることを示している。すなわち、過去の生産量の対前年減少率をさかのぼると、USDAの統計データによれば、1988年の大規模な干ばつの際には、米国のトウモロ

コシの1988/89年度の生産量は対前年で▲31%減少した(図2)。マーケットは既に米国の今年の減産を織り込み、その焦点は既に今後の南半球の作付動向に移っている(図2)。さらに、マーケットは、2007-8年に見られたような、輸出国による連鎖的かつ狼狽的な輸出規制は今回は見られないという点では、落ちついた動きになっていると解釈する事が可能である。

21世紀に入り、穀物や大豆の国際価格は、既に2006-7年におけるオーストラリアの2年続きの干ばつ、また2010年夏のロシアの干ばつなどに端を発する高騰局面を経験してきた。また、これらの高騰局面毎に価格水準が切り上がっている。農産物の国際価格の上昇は、先進国よりエンゲル係数の高い新興国や開発途上国の台所を直撃する恐れがある。

さらに、最近の世界経済の減速感、とりわけ、欧州債務問題、米国の「財政の崖」問題、中国の景気減速懸念などにみられるように、今後の世界マクロ経済の回復力には暗雲がただよって

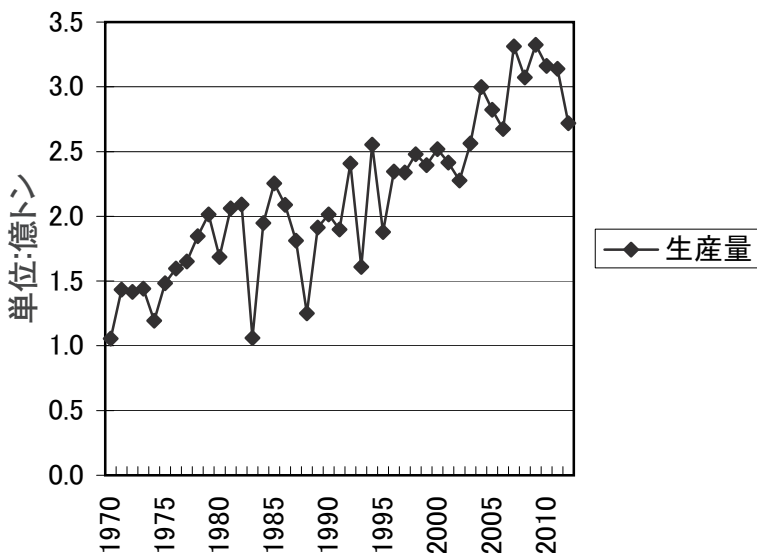
る。すなわち、新興国や開発途上国を中心として、農産物価格発による世界的なスタグフレーション(経済活動の停滞(不況)と物価の持続的な上昇が併存する状態)の危険性が増加している。

我が国に目を転じると、現在、カロリーベースでの食料自給率は39%(平成23年度速報値)であり、我が国は米国を中心とする世界の農産物輸出国に食料の大半を依存している。マクロ経済的には円高局面というメリットがあるものの、今後、トウモロコシや大豆かすを原料とする飼料価格の上昇による食肉や乳製品などの畜産物価格の上昇は避けがたいだろう。

我が国は、長期的な対策として、農産物の輸入価格の乱高下による影響を軽減するために、水田フル活用など我が国農業の体質強化を図るとともに、輸入先の多角化や備蓄の活用などを通じて、食料の安定供給の確保に努める必要がある。

(農林水産省農林水産政策研究所
上席主任研究官(食料・環境領域))

図2 米国のトウモロコシ生産量の推移



資料: USDA "PSD database"& "WASDE November 2012"

逼迫する世界の食糧と日本の 食糧供給を考える

柴田 明夫

1. はじめに

今夏、米中西部穀倉地帯を襲った半世紀ぶりの干ばつは、9月に入ってひとまず終息したものの、大豆、トウモロコシ価格を史上最高値に押し上げたばかりでなく、今世紀に入ってからの世界食糧市場の脆弱性を改めて浮き彫りにした。米農務省(USDA)は農産物需給報告で、米国の大豆、トウモロコシの減産に対し、1)大規模なレーショニング(価格高騰による需要の減退)が起こる、2)南米、中国での大幅な増産予想、という需給両面から調整されるとのシナリオを描いている。しかし、世界の小麦市場では、米国では増産となったものの、黒海沿岸地域では干ばつの被害が深刻化するなど不安要因も残る。ここ数年の穀物価格の高騰は投機マネーによる一過性の上昇ではなく、需要拡大を映した『均衡点価格の変化』である。

世界の穀物消費量は、今世紀に入って前年を下回ることなく過去最高を更新し続けている。生産も拡大しているものの天候異変によりますます不安定化し、世界在庫が取り崩される構図にある。

2. 干ばつが米農務省の大豊作予測を一転させた

米農務省(USDA)は例年5月の需給報告で、米国および世界の農産物需給予測に加えて、新年度の需給見通しを発表する。5月10日に発表

された2012/13年度(概ね12年後半～13年前半、以下同じ)報告では、米国のトウモロコシの生産量は、作付面積の拡大と単収アップ(エーカー当たり)により前年度の123.58億ブッシェル(Bu)から147.90億Buへ拡大し、過去最高となる見通しであった。一方、作付面積の減少が予想される大豆の生産量も、単収アップにより32.05億Buと前年度の30.56億Buから小幅増加との予測であった。特に、トウモロコシの場合は、4月の作付期から好天に恵まれ、速いペースで作付けが進捗したことで、例年7月後半となる開花・授粉期が上旬に前倒しされる可能性が高まった。これにより7月末に襲来する高温乾燥天候を免れることができると判断したUSDAは、単収を147.2Bu⇒166.0Buへと上方修正し、史上最高と見込んだ。世界穀物生産量は23.72億トンと、過去最高であった前年度の23.00億トンを7,200万トン上回り、同消費量も23.56億トンと過去最高を更新する見通しであった。しかし、5月時点での見通しは、あくまでも机上の計算でしかないことを改めて知らされることになった。

6月に入ると、米中西部での高温乾燥天候が深刻化し干ばつに発展。それまでのUSDAの空前の豊作シナリオが一変した。2011年秋より勢力を強めたラニーニャ現象の影響と思われる世界的な異常気象の発生が米中西部を襲ったためだ。主産地のインディアナ州では、6月に入っ

1Buはトウモロコシが25.4kg、大豆、小麦は27.2kg

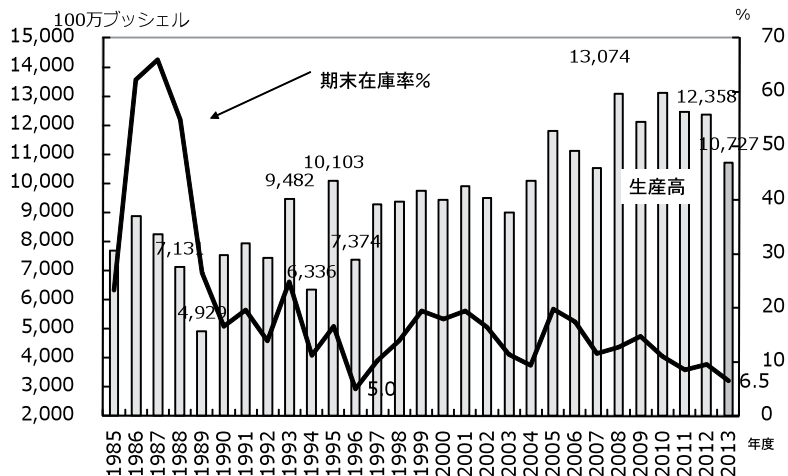
て一日の最高気温が連日過去20年間の平均値を超え、40度を超える日もあった。6月～7月にかけてほとんど降雨は無く、8月以降も干ばつが継続。その後コーンベルトに降雨があったものの、すでに開花・授粉期を逃したトウモロコシにとって、もはや生育の改善には手遅れとなった。干ばつの影響は、ミシシッピ川の水位低下を招き穀物の搬送にも支障を生じさせた。

こうしたなか、8月に続き9月12日に発表されたUSDA需給報告では、今年の米国のトウモロコシ生産量は107.27億Buで、前年の123.58億Buから13%減少。6月時点から27%下方修正された(図1)。大豆は26.34億Buで、前年の30.56億Buから14%弱減少し、6月から18%下方修正された(図2)。これに伴い、期末在庫率もトウモロコシが前年の9.6%から6.5%へ低下。大豆は4.1%から4.3%にわずかに上昇したものの、いずれも来年8月末の在庫が「一粒も無くなる」恐れのある危機的レベルである。なお、小麦は約75%が冬に作付し6月に収穫する冬小麦のため、干ばつの影響を免れ、生産量は22.68億Buと前

年の19.99億Buから13%拡大。6月時点からも小幅上方修正された。ただ、冬小麦の作柄悪化が懸念されている。

シカゴ・トウモロコシ価格は作柄悪化が深刻化するに伴い、6月1日の1ブッシェル=5ドル台半ばから7月後半には8ドル台前半まで約50%急騰。大豆も13ドル近辺から17ドル台後半へ約30%上昇。それぞれ08年、11年の史上最高値を更新した(図3)。生産者にとって価格高騰は売上拡大につながるがはずだが減産により相殺される格好だ。一方、トウモロコシ価格の高騰は、米国の畜産および養鶏農家を直撃。コスト負担に耐えかねた農家が家畜を維持できず処分すれば、畜産価格の下落を招くことになる。さらに、穀物価格の高騰は、世界の食料価格にも影響を及ぼしつつある。FAO(国連食糧農業機関)が毎月発表している食料価格指数(2002～04年=100)は、6月まで下げ基調にあったものの、7月に213ポイントと6ポイント上昇し、8月も同レベルで推移。2008年の世界的食料危機時に迫りつつある。

図1 米国トウモロコシ生産および期末在庫率



(出所)USDA報告2012.9より筆者作成

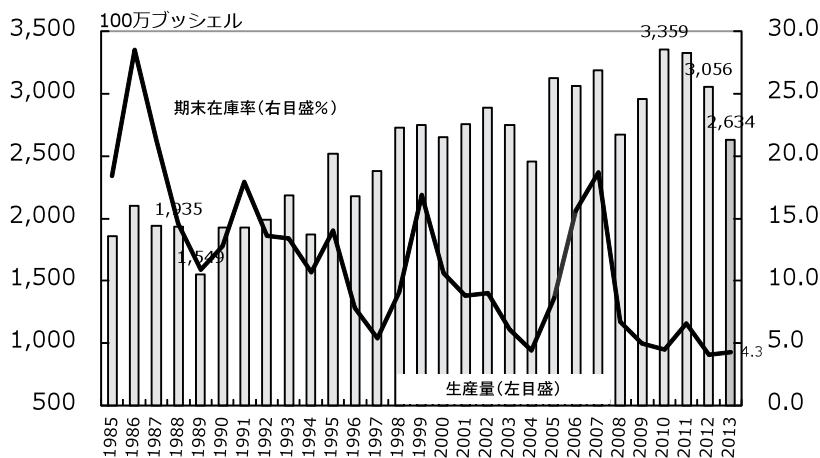
3. USDA需給報告にみるシナリオが崩れる時

大豆、トウモロコシが史上最高値を付けたことにより、市場では今回の干ばつ相場は終息し、今後は急反落するとの見方が多い。しかし筆者は、いったんは下値を探る展開となるものの、その後はUSDA需給報告における幾つかの意図的なシナリオが、今後の事実によって一つ一つ覆されることにより、価格上昇の第2幕が十分

あると見ている。

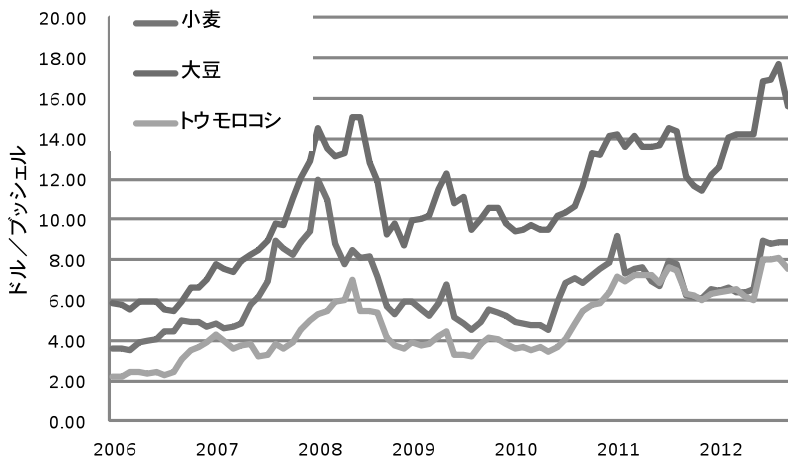
今年の大干ばつ＝減産という現実に対し、USDAは主に2つの面から、需給調整が進むと想定している。1つは、トウモロコシの需要面で大規模なレーショニングが起こるとの見立てである。レーショニングとは、価格高騰による需要減退である。USDAは米国内の飼料用はじめエタノール向け需要、輸出需要がいずれも大

図2 米国大豆の生産高・期末在庫率



(出所)USDA報告2012.9より筆者作成

図3 シカゴ穀物価格の推移



(出所)CBOT(シカゴ穀物取引所)より筆者作成

幅に落ち込むと予測。もう1つは、大豆の供給面で、米国の減産分をブラジル、アルゼンチンの大増産で補うという見方である。果たしてシナリオどおりに行くのか。

図4は、世界の穀物需給の推移である。1990年代後半にかけて生産・消費量ともに18億トン台で安定的に推移していたが、2000年代に入って拡大基調に転じ、2011/12年度は23億トンに達している。10年間で約5億トン市場が拡大したわけである。特に筆者が注目しているのは消費である。世界の穀物消費量は、今世紀に入って毎年前年を下回ることなく史上最高を更新し続けている。

旺盛な消費に追い付こうと、生産量も拡大しているものの、干ばつなど天候異変もあり増減産を繰り返しながらの拡大傾向となっている。通常、需給がひっ迫し価格が高騰すれば、生産は増え需要は抑制される。すなわちレーショニングが起こるはずである。しかし、現実には、高値でも需要が減らず、世界の在庫が取り崩される構図にある。すなわち、世界の食糧事情においては、近年レーショニングが起こり難くなっ

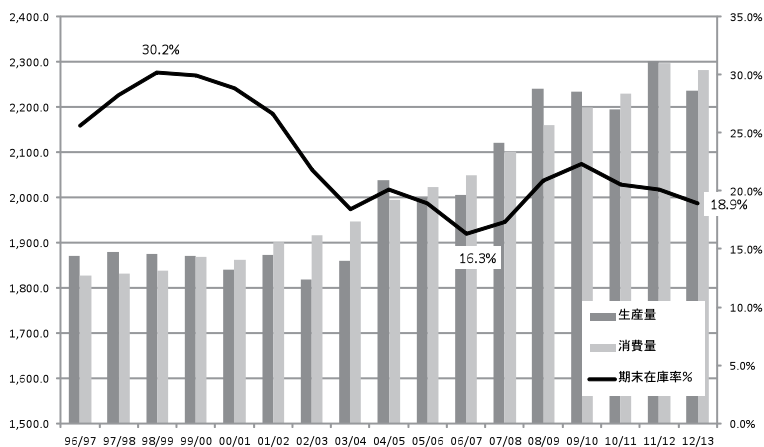
ているのが特徴だ。旧聞に属するが、この背景には世界的な人口増加と、増加している新興国人口の大半が豊かになり食生活が向上していることがある。ちなみに、世界の穀物生産・消費量の4割以上は家畜のエサであり、肉1キロ生産するためには平均7キロの飼料が必要とされる。こうしてみると、大規模なレーショニングを想定したUSDAの見通しには検証が必要であろう。

また、1990年代までは世界の穀物市場は情報の透明性が高かった。主な生産・輸出国は、米国、カナダ、豪州、欧州などの先進国であり、主要輸入国は日本、韓国、台湾などの国々のためだ。しかし、今世紀に入って市場が急拡大する中、参加するプレーヤーも変わった。新たな生産・輸出国にブラジル、アルゼンチンが加わり、新たな輸入国として中国が加わった。もはや情報は透明ではないのである。これにより投機マネーも入りやすくなった。

4. 中国のトウモロコシ輸入は減少するか —黒龍江省視察の印象

米農務省は、トウモロコシ減産を、中国の増

図4 世界の穀物生産量・消費量 & 期末在庫率の推移
単位100万トン (出所)米国農務省需給報告2012.9.12



(出所)USDA需給報告2012.9より筆者作成

産・輸入減などが補うとの見方をしている。確かに、今後の穀物価格を占う上では中国の生産動向がポイントとなる。まず需要面を検証してみよう。USDAは、トウモロコシの需要を6月時点の137.75億Buから9月では112.50億Buへと18%、25.25億Bu下方修正した。具体的には、飼料用が24% (13億Bu)、エタノール用10% (5億Bu)、輸出34% (6.5億Bu)へと、いずれも下方修正されている。ちなみに、輸出の削減分6.5億Buは、トン換算では1,655万トンに相当する。これに伴い、世界全体のトウモロコシ輸出量も1,431万トン(10,532⇒9,101万トン)下方修正されている。

輸出減少の最大要因は中国向けである。USDAは中国のトウモロコシ輸入予想を700万トンから200万トンへ500万トン下方修正している。この根拠として、相場高騰によるレーショニングに加えて、中国のトウモロコシ生産量が当初の1.95億トンから2億トンへ500万トン拡大すると見ている。しかし、消費量は2.01億トンと旺盛で生産量を上回ることから、中国の輸入インセンティブは依然強いと言えよう。

折しも、筆者は新潟県の「食の新潟国際賞財団」の訪中ミッション(総勢13名)の一員として、9月7日～12日にかけて中国の食糧基地である中国黒龍江省三江平原を訪れた。黒龍江省の面積は日本の1.1倍、耕地面積は約1,180万ha、うち農地は260万haで日本全体の水田面積に匹敵する。新潟空港を中国南方航空で昼に飛び立って、約2時間半で黒龍江省の首都ハルビンに着陸。大型バスに乗り継いで一路、三江平原の中心都市ジャムスを目指す。片道約600キロの行程だ。高速道路の入り口には「世界大湿地」の看板が目飛び込んできた。ちなみに、三江平原とは、黒龍江、松花(シヨウカ)江、ウスリー江(アム

ール河の支流)の3大河川とその2,000近い支流が、蛇のように広大な大地をのた打ち回る広大な地域だ。また、作家山崎豊子の「大地の子」の舞台でもある。かつて不毛の地と言われたこの大湿地帯が、今や中国の食糧基地として豊穡の大地に変わったのには、新潟県亀田郷土地改良区の貢献が大きい。

1972年の日中国境回復を契機に、同地では1976年より日本の残留孤児・婦人帰国運動が始まる一方、中国政府は日本に農業開発協力を要請。これに応じたのが当時、湿地の乾田化技術を有する亀田郷土地改良区だ。佐野藤三郎理事長を団長とする調査団が大規模な地質調査を実施。1980年代に洪水制御や農地の排水能力向上、灌漑・発電のための多目的ダム建設計画がスタート。日本の円借款などにより1997年に着手された龍頭橋ダムは、2003年に完成し4万ha強の湿地が優良な水田・畑に変わった。これを足掛かりに黒龍江省では次々と総合農業開発が進められていった。現在では中国の食糧基地となっている。黒龍江省統計局によると、2011年の食糧生産高は5,570万トンで中国全体の1割強を占める。内訳は、トウモロコシ2,675万トン(国内シェア14%)、コメ(粳)2,062万トン(同9%)、大豆541万トン(同40%)である。大豆、トウモロコシの生産は中国最大だ。グローバル経済下、同地の生産動向が世界の穀物市場に直接影響を及ぼすことになる。

9月末の収穫期を前にトウモロコシ畑には、8月に数十年ぶりの台風襲来により一部倒伏したものも目に付く。国営新華農場によれば生産は過去最高とのことだ。事実であれば、今年中国のトウモロコシ生産量は、米農務省の見立てどおり2億トンに達し、輸入も当初予想の700万トンが、200万トン程度に収まる可能性は高い。しかし、幾つか疑問点も浮かんできた。

一つは、生産拡大の要因が密植であることだ。確かに畑一面に生育したトウモロコシ間に隙間がない。1ha当たり9万本植えて、6万本を刈り取るのだそうだ。通常、密植を行えば害虫が発生しやすくなる。現地の商社駐在員によれば温暖化もあり、最近は見たとのいない虫が発生していると言う。しかし、農場の責任者は、6月に害虫駆除を行っているから心配はないと言う。密植が可能なドイツの品種を植えているためトウモロコシ1本当りの肥料・農薬、水は少なくて済むとの説明だが、単位面積当たりの肥料・農薬使用量は増加するはずだ。しかも毎年同じ作物を作付していれば、ある年突然、連作障害により大凶作という懸念はないのか。稲作も密植により、1ヘクタール13~14トンの収穫とのことだ。日本の倍である。

一方、消費は、飼料用、異性化糖、アルコール(焼酎)、食用油など旺盛で生産を上回る。輸入意欲は強いと言えよう。特に中国内のトウモロコシ価格がトン当たり400ドル弱に対し、シカゴは歴史的な高値圏にあるとはいえ300ドル程度(Bu25キロ=7.5ドルを40倍してトン換算)で、米西海岸からの海上運賃(トン25ドル)を加えても中国の国内価格の方が国際価格よりも遥かに高い。食料インフレを懸念する中国にとって輸入の魅力は大きいはずである。実際、国家食料局は、3月以降、米国穀物輸入協会や米穀物メジャーと情報交換。4~5月にかけてすでに100万トンを超える米国産トウモロコシの輸入契約が行われたもようである。今後、輸入量が100万トンに止まるとは到底思えない。こうしてみると、中国のトウモロコシ生産は伸び切るころまで伸びており、このレベルを維持することは容易ではなさそうだ。その分、国際市場の大きな攪乱要因となろう。

(写真1) 密植により大增産をはかる中国のトウモロコシ



(写真2) 品質も良くない?



(写真) 筆者撮影

5. エタノールとの競争

トウモロコシ価格の引き下げ要因として、エタノール向け需要の減少がある。トウモロコシのエタノール向け需要は、2000年代に入って、再生可能燃料基準(RFS)によるバイオ燃料のガソリンへの義務的混合率の引き上げなどの要因から急拡大。現在、米国ではE10(エタノール10%)からE15あるいはE35への引き上げが行われている。これによって同需要量は2000/01年度の2,000万トン弱から2010/11年度の1億2754万トンまで6倍以上となり、需要全体の4割を超え、飼料向け需要を上回っている。しかし、その後、トウモロコシ価格の高騰でエタノール工場の採算が悪化し、操業停止に至る工場も現れている。これを映し、2012/13年度のエタノー

ルの消費量は1億1,314万トンまで減少している(図5)。また、トウモロコシのエタノール向け使用については、畜産関係団体や米国の上下院議員などから、RFSの免除・削減を要求する動きも強まっている。これに対し、ヴィルサック農務長官は、米国産トウモロコシは、干ばつの被害を受けたとはいえ、過去8番目の収穫量を見込んでおり、国内外の需要を十分満たすことが可能であるとして、今のところ具体的な見直しには至っていない。11月の大統領選挙を控えたオバマ大統領にとって、エタノール産業支援は農民票の拡大につながるためである。

6. 南米の大豊作は実現するか

一方、USDAの供給面でのシナリオとしては、米国の2012/13年度の大豆生産量は前年度の8,317万トンから7,169万トンへ約14%弱、1,148万トン減少する。これに伴い、輸出は3,701万トンから2,871万トンへ27%、830万トン減少する見通しである。これに対し、世界の大豆生産量は、前年度の2億3,709万トンから2億5,813万トンへと約9%、2,104万トン拡大する。このた

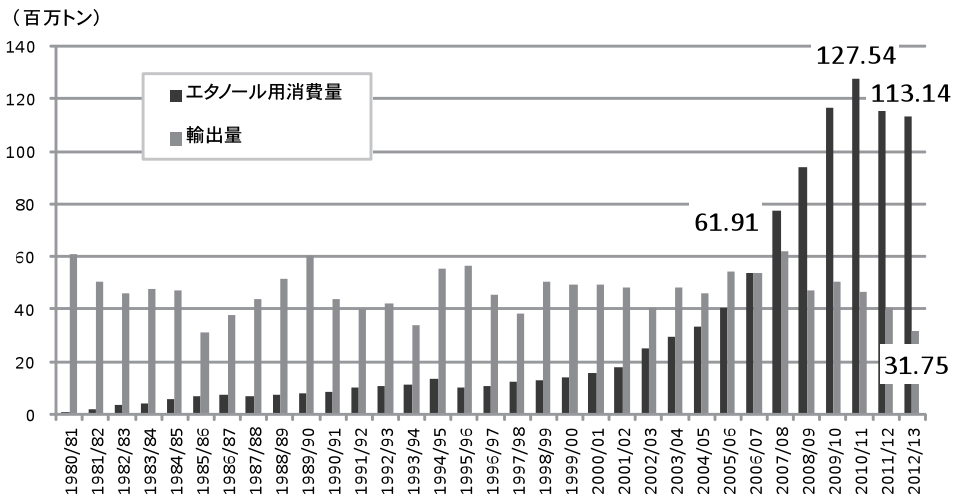
め、世界の大豆需要は前年度の2億5,446万トンから2億5,673万トンへとわずかに拡大する。ブラジルおよびアルゼンチンの大豆生産が前年度の1億650万トンから1億3,600万トンと2,950万トン拡大し、史上最高を更新すると予測しているためである(図6)。同じく2国の輸出も4,540万トンから5,260万トンへと720万トン拡大を見込んでいる。すなわち、米国の削減分をブラジル、アルゼンチンの輸出上方修正が補う格好である。しかし、南米の作付けは10月にスタートしたばかりであって、USDAが早々と想定する大増産の根拠は薄い。ちなみに、日本の気象庁は2012年8月4日、「エルニーニョ現象が発生し、冬まで継続する可能性が高い」と発表している。むしろ、南米において今後、干ばつ・豪雨などの異常気象が発生する可能性が高い。

事実、世界的な油実専門誌オイルワールドは、10月に入って「ブラジルでの降雨不足、アルゼンチンの多雨」を伝えている。

7. 小麦市場に2010年の悪夢再来はないか

さらに気掛かりは世界的小麦生産である。米

図5 米国の輸出およびエタノール向けトウモロコシ需要



(出所) USDA

国の小麦生産は、干ばつの被害を免れ増産となったものの、ロシア、ウクライナ、カザフスタンなど、黒海沿岸の新興小麦生産・輸出国地域で干ばつが深刻化しつつある。市場では、2010年8月の再来懸念も生じている。

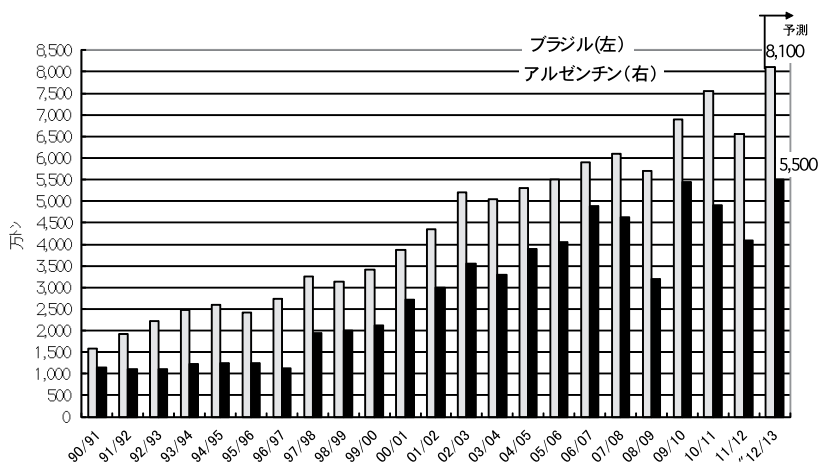
思い返せば2010年夏には、世界各地で発生している異常気象が、ロシア、カザフスタン、ウクライナなど黒海沿岸の小麦産地に深刻な干ばつをもたらし、大幅減産が不可避になった。プーチン大統領は8月5日、干ばつによる非常事態を宣言し、小麦などの穀物輸出を12月末まで禁止すると発表。10月に入って、乾燥土壌により冬穀物の作付面積減少の懸念が強まると、禁輸期間は翌2011年6月末まで延長された。輸出規制の波は隣国にも広がった。ウクライナ政府は10月、小麦・トウモロコシなどの穀物の輸出割当を12月末まで実施すると発表、11月には2011年6月末までの延長を決めた。作付面積の減少や干ばつによる単収低下で穀物生産が大幅減少し、食料安全保障が懸念されるようになったためだ。

米農務省(USDA) 需給報告(2011年2月)によ

ると、2009/10年度の世界小麦生産量6億8265万トンのうち、ロシア(6,170万トン)、ウクライナ(2,090)、カザフスタン(1,700)の3カ国の生産量は9,960万トンで、15%弱であるが、世界の小麦輸出力1億3,650万トンに対して、3カ国の輸出力は3,577万トン(ロシア1,856、ウクライナ934、カザフスタン787)で27%に達する。それが、2010/11年度の3カ国の小麦生産量は3割減少、輸出力に至っては半減(3,577万トン→1,600万トン)した。この影響は、1)米国、カナダ、豪州への小麦買い付けの集中、2)競合するエサの部分でのトウモロコシへの需要シフト、3)トウモロコシの需要拡大→価格上昇に伴う大豆価格の連れ高、といった形で波及していくことになった(図7)。

2012年10月のUSDA報告では、2012/13年度のロシアの小麦生産は、3,800万トンで前年度の5,623万トンから▲32%。輸出は900万トンで同2,163万トンから▲58%と大幅減少となる見通しだ。この間、ウクライナも、生産は2,273万トン⇒1,550万トンへ▲32%、輸出1,139万トン⇒446万トンへ▲61%減となる見通しである。

図6 南米の大豆生産



(出所)USDA

ウクライナでは、小麦輸出量がすでに年間輸出量の80%を超えたため、政府が10月19日、貿易業者に対し11月15日より輸出禁止措置導入の必要性について説明したとの報が流れた。市場では、早晚ロシアも輸出規制に動くとの見方が広がっている。

豪州でも西豪州で高温乾燥天候が伝えられている。8月に悲願のWTO加盟を果たしたロシアが、輸出制限を行うことはないと思うが、作柄が悪化すれば、突如小麦禁輸を宣言し、米国産小麦への買い付け集中、小麦価格高騰、大豆、トウモロコシ価格を押し上げるといった可能性も否定できない。これは要するに2010年8月にロシアのプーチン首相(当時)による小麦禁輸の再来である。このようにみると、今回のUSDA需給報告が、楽観的な需給均衡論の上に作られていると思えるのである。

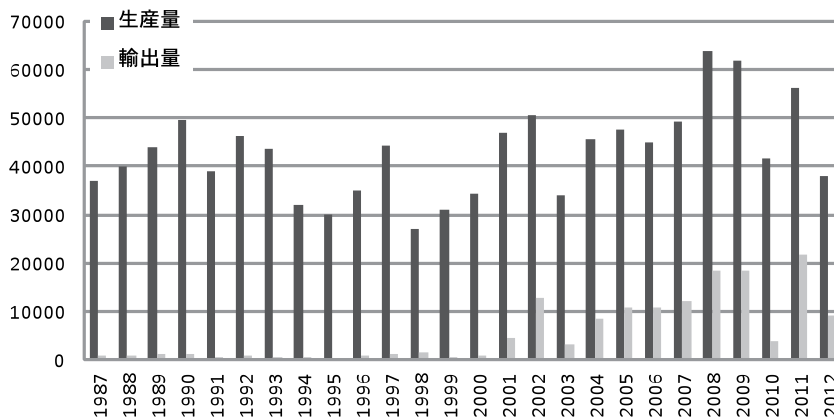
8. 日本への影響 農業インフラは大丈夫か

今回の穀物価格の高騰は、2つの面から日本に影響を及ぼすことになろう。1つは、家計にとっての食料品価格の上昇であり、他は日本農業を見直す動きである。

2007～08年の穀物高騰時には、円相場が1ドル117円、103円と円安のため食料品価格の上昇に繋がった。今回は80円を割る超円高もあって、いまのところ食卓への影響は限られている(図8)。しかし、この超円高が2年近く続いており、今回の穀物価格の高騰は直接、食品メーカーの原料コストを押し上げる。コスト競争は限界であり価格転嫁をせざるを得ない。政府の小麦売り渡し価格の本格的な上昇は来年4月の価格改定時に進む可能性が高い。トウモロコシ輸入の9割強を米国に依存する畜産農家にとって、すでに生産費に占める飼料費が4～6割に達しており、経営が圧迫される。

一方、国内生産の拡大に向け農業を見直す動きが強まろう。しかし、長年コメの生産調整を続けてきた現在の日本農業は、こうした要請に応えることができるであろうか。また、日本の農業も干ばつのリスクから無縁ではない。2012年8月に入って首都圏の水がめである利根川上流8ダムの貯水量が40%まで低下。流域6都県では11年ぶりの取水制限を始めた。農林水産省によると、過去10年間をみても、沖縄を除くすべての都道府県で渇水時の調整(渇水調整協議会

図7 ロシアの小麦生産・輸出(1,000トン)



(出所)USDA

の開催)を行っている。

筆者は8月に石川県と新潟県の土地改良区を訪れた。土地改良区とは1949年に制定された土地改良法により、一定の地区内で土地改良事業を行うことを目的として設立された法人だ。主な活動は農地の圃場整備や農業用のため池や水路などの維持や管理を行うことである。日本の農業用水の歴史を辿ると、川からの取水ルールは、干ばつ時の水争いの長い歴史を経て、社会慣行として形成されてきた。戦後は、土地改良事業を通じた農業水利の再編と他種利水との調整が図られている。暴れ川を持つ石川県手取川七カ用土地改良区では、水量が豊かでも水争いが絶えなかったとのことだ。新潟県の加治川沿岸土地改良区では、渇水時の農業水利をめぐる、番水(節水のための排水管理)がいまも行われている。

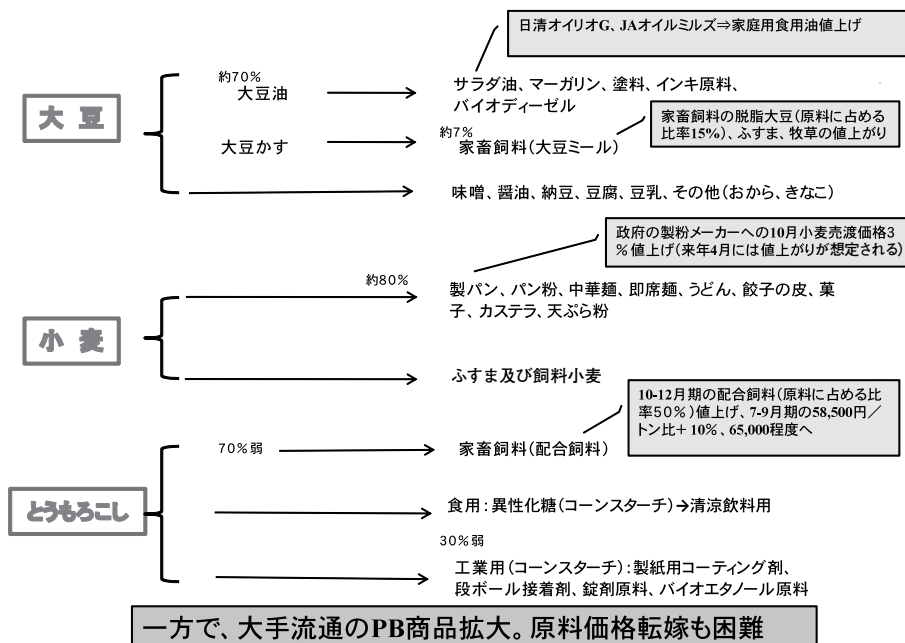
これら土地改良区の委員の悩みは農家の離農である。地域の共有財産である農業用水は、集

落内の共同作業ではじめて維持可能だ。しかし、最近では20~60戸からなる多くの集落で、1、2戸の農家しか残っていないという。これまでは、離農者がであれば農地を請け負う農家もあったが、いまは請け負った農家にも離農者が増えている。高齢化が最大の理由だが、背景には40年にわたる生産調整があるといえよう。

生産調整は農家の経営安定には必要不可欠としても、一方で将来に対する意欲を失う。それは同時に、耕作放棄地の増加や農業水利秩序の崩壊、水源涵養林の荒廃など、地域資源の崩壊に直結する。農業用水という精緻なインフラが維持されても、肝心の農家がいなければ元も子もない。政府は、早急にこれら地域資源を丸ごと保全する方向に政策転換し、迫り来る食糧危機に備えるべきである。

(株)資源・食糧問題研究所
代表

図8 穀物・大豆の主な用途と価格高騰の影響



衣と泡

畑 江 敬 子

天ぶらの衣

天ぶらの衣は「からりと軽い」状態がおいしいとされている。揚げることによって、衣に含まれていた水分が蒸発し、ぶつぶつと細かい泡が揚げ油の表面に上がってくる。水が蒸発し、その代わりに油が入った状態である。からりと軽い天ぶらとは、揚げたあとこの油に空気が入れ替わり、水分が少ない衣であることがわかっている。この水と油の交代をうまく行なわせるために、専門店では、混ぜる水の温度や、小麦粉と卵水を加えたときの扱い方などに細心の注意が払われている。水の温度については、0、15、30℃を比較すると、0℃では浮きが悪く、30℃では粘りがでて、15℃が適当であったという報告がある。小麦粉と卵水を合わせるときも、グルテンの粘りを出さないように軽くまぜる。そして、揚げた直後を食べることが、からりと軽い衣を味わうための秘訣である。

天ぶらの衣でも、惣菜天ぶらの場合には、小麦粉と水を合わせたバターに重曹を加えることがある。衣を高温の油に入れると、直ちに炭酸ガスを発生するので、こうすると衣が分散しやすく、あげ種の表面に固まりつくことが防がれる。そのため、揚げ衣の表面積は大きくなって、水と油の交代が効果的に行なわれる。重曹を添加していない衣に比べると、やや硬い感じになる。重曹を使うと衣はアルカリ性になるので、小麦粉のフラボノイド色素が黄色味を呈し卵を使ったときの色に近くなる。

天ぶらの衣は時間が経つと、どうしても揚げた直後のからりとした口触りが、べた

っとしたものになるが、重曹が入っているとあまりべたつとはならない。

フリッターなど

洋風料理のフリッターや中国料理の高麗では、天ぶらとは異なり、衣を膨化させて、ふんわりとした口触りに仕上げる。このような衣では卵白を泡立てて空気を含ませたバターを材料の周囲につけて揚げる。揚げている間に気泡が膨張して衣が膨化する。中身は火のとおりやすい白身魚や鶏肉、バナナなどで衣は柔らかい状態である。

かりんとう

「かりんとう」は昔なつかしい菓子の一つである。小麦粉に粉の50%ぐらいの水を加えて捏ねたドウを油で揚げた、空洞が沢山ある菓子である。このドウに砂糖や油脂、卵等の副材料を加えずに、あるいは膨化剤を加えずに、油の中に入れて揚げると、かりんとうは爆発してとても危険である。もう亡くなられた私の恩師、松元文子先生は、太平洋戦争後の食糧が不足しているなかで、かりんとうの実験を行なうにあたり、当時貴重品であった砂糖を節約しようと、砂糖なしで(副材料なしで)ドウを捏ねて揚げた。そうしたら、揚げている途中で、ものすごい音とともに、かりんとうが天井まで飛び上がり、危険を感じたということであった。

同じドウを一旦蒸してから揚げると、破裂は起こらない。

蒸してから揚げたドウと、蒸さずに揚げたドウ(普通ドウ)をくらべると、蒸したドウの方が膨化は遅く、膨化度は小さく、普通

ドウに見られた外皮の形成はない。これは、蒸しドウは水和の状態が変わり、揚げ始めに脱水しにくく、ドウの吸油量が少ないため外皮が形成されないからと考えられる。

普通ドウでは揚げ加熱中の温度上昇に伴い、内部の気泡に水蒸気が蒸発して、ドウの体積が増す。一方、外皮はドウの膨張に従って伸びることが出来ればよいが、硬い外皮が形成されると伸びることは出来ない。内部からの膨圧を支えきれなくなると外皮が破裂する。油の中で揚げる場合、蒸したり、オープンで加熱したりする場合に比べ、食品の温度の上昇は速いので、ドウの外側のでんぷんの糊化とグルテンの不活性化が急激に起こり、外皮の形成も、ドウの膨張も急速に起こるために爆発は起こるのであろう。

コロッケの破裂

外皮と内容物からの膨圧のせめぎあいによる破裂は、コロッケを揚げている場合にも見られる。

コロッケやドーナツ、パウンドケーキなど調理過程でみられる種々の亀裂発生の機構については長尾慶子氏の博士論文に詳しい。その中のコロッケの破裂に関する部分を以下に紹介する。

乾燥ポテトに水を加えて成形し、バターとパン粉で厚みの異なる衣をつけ、油の中で揚げてポテトコロッケを調製した。このとき、ポテトコロッケは揚げ加熱中に破裂が起こる。揚げ加熱中のコロッケの破裂の様相は衣の厚さによって異なった。

衣が薄い場合(1mm厚さ)は表面にピンホールのような破裂が起こり、内容物が揚げ油中に吹き出した。破裂の起きるまでの揚げ時間は揚げ温度によって異なった。

揚げ油の温度が160℃の場合は揚げ始めてから45～75秒の間に、油の温度が180℃

の場合は34～53秒後に、油の温度が200℃の場合は26～41秒後に、集中してピンホール破裂が起こった。揚げ温度が高いほど、破裂時のポテト部分の温度は高くいずれも100℃以上であった。また、油が高温なほど、破裂の可能性のある時間帯は短く、低温ほど長かった。

このピンホール破裂は1mm厚さの衣にのみ見られ、衣の厚さを2～3mmにすると、破裂はピンホール破裂とはならず、全体に長く亀裂が起こり(全体破裂)、内容物が外の油に飛び出した。衣の厚さが2mmのポテトコロッケでは揚げ加熱開始から2分後に100%が、衣の厚さが3mmの場合は加熱開始から3分後に80%が全体破裂を起こした。全体破裂の亀裂の入る方向はコロッケの長軸方向に平行に起こった。

衣の厚さが4mmになると、破裂は起こらなかった。

ピンホール破裂が起きるのは揚げ加熱中に衣が硬化して外皮を形成する。同時に外皮直下のポテト部分の温度が100℃以上になったときに蒸気圧が急激に高まる。外皮の強度の圧力換算値よりも、外皮直下の蒸気圧のほうが大きくなると、その部分でピンホール破裂がおこる。

全体破裂は、コロッケ内容物の温度上昇に伴う体積膨張による内部圧が、外皮の圧力を上回ったときに亀裂が生じることによって起る。亀裂の方向については一般に円筒の表面に働く内部圧を長軸方向と長軸に対し直角方向とを比較することで説明できた。

なお、ピンホール破裂を防ぐには、衣に近いポテトの水分を少なくする、あるいは予め冷蔵することである。また、全体破裂を防ぐには、衣に展延性のあるキサントガム等を添加し予め冷凍することである。

(昭和学院短期大学学長)
(お茶の水女子大学名誉教授)

簡単おいしい「復活レシピ」

ひらの あさか

今回は、つくりおいた料理を上手に使っておいしく復活、小麦粉料理にリメイクします。

クリームシチューがグラタンに

「クリームシチュー」鶏もも肉はひと口大に切り、塩とコショウをふってから小麦粉をまぶす。玉ねぎはくし切りに。じゃがいも、にんじんは皮をむいてひと口大に。ブロッコリーは小房に分ける。鍋にオリーブオイルをひいて鶏肉を炒め、火が通ったら一旦器に移す。同じ鍋にオリーブオイルを追加して玉ねぎとじゃがいも、にんじんを炒め、鶏肉を戻して、マッシュルーム缶詰は水をきってここへ加え、さらに炒め、白ワイン、ローリエの葉を入れて絡めるように全体をかき混ぜてから水、洋風スープの素(ブイヨン)を加えて煮込む。別の鍋にバターを弱火で熱して、小麦粉を加えて木べらで混ぜ、牛乳を加え、塩、コショウを入れてホワイトソースをつくる。野菜類に火が通ったら、ブロッコリーを加えて火を通して、ホワイトソースを合わせて仕上げる。

「クリームシチュー」を使ってリメイク「パングラタン」。フランスパンはひと口大に切って、バターを塗った耐熱皿に入れて

クリームシチュー、ベーコン薄切りを細く刻んでパラッとのおせ、パン粉、ピザ用チーズをのせてオーブントースターでチーズにこんがり焦げ目がつくまで焼く。

同じく「クリームシチュー」を使ってリメイク「マカロニグラタン」。マカロニは塩を加えた、たっぷりの熱湯で規定の時間ゆでる。

バターを塗った耐熱皿に入れてクリームシチュー、ミニトマトはヘタを取ってのせ、パン粉、ピザ用チーズをのせてオーブントースターでチーズにこんがり焦げ目がつくまで焼く。

とんかつ、から揚げが変身!

「とんかつ」は「豚マリネ」に変身。ロースとんかつは細く切る。玉ねぎは薄切りにして水にさらして、水気をきる。セロリ、にんじんも薄切りにする。市販のフレンチドレッシングに粒マスタード、レモンの絞り汁を合わせ、まず野菜と合わせてから、細切りにしたとんかつを合わせる。冷蔵庫で保存して味をなじませる。

「鶏のから揚げ」が「鶏のトマトソース煮」に。玉ねぎ、にんにくはみじん切りにする。フライパンにオリーブオイルをひいて玉ねぎとにんにくを炒める。火が通ったら、缶入りのカットトマト、白ワイン、し

ようゆ少々とトマトケチャップを加えたソースをつくり、鶏のから揚げを加えて軽く煮る。酸味のあるソースとから揚げの相性がいい。

ひき肉カレーはカレーサンドに

「ひき肉カレー」玉ねぎ、にんにくはみじん切り、じゃがいも、にんじんは細かいさいの目に切る。フライパンにサラダ油を熱し、玉ねぎを炒め、透き通ってきたら、にんにくを加え、次に合いびき肉を加えて火を通してから、ほかの野菜を加えてさらに炒める。ここへ白ワインを入れてアルコールをとばして、水と洋風スープの素(ブイヨン)を加えて煮込む。カレールウを加えてさらっと仕上げる。翌日に野菜がとろけてひき肉ベースになったひき肉カレーは「カレーサンド」に。カレーにケチャップ少々を加えて電子レンジであらかじめ温めておく。食パン厚切りは半分は切ってから真ん中に切れ目を入れて温めたカレーを挟む。これをオーブントースターで焼き色がつくまで焼く。

野菜スープをさらにおいしく

「野菜スープ」豚バラブロックは食べやすい大きさに切る。じゃがいも中は4つに切る。キャベツはざく切り、にんじんは大きめの乱切り、セロリの茎は細かく、葉は細切りに。小玉ねぎは皮をむいておく。鍋に具材を入れ、たっぷりの水を加えて煮込み、煮立ったら洋風スープの素(チキンコンソメ)を入れて全体に火が通るまでじっくり煮込む。

翌日の朝ごはんにおすすめなのが「野菜スープのパン粥」。小鍋に野菜スープを煮

立たせ、フランスパンをひと口大に切って加えて煮て、ボウルに移して、パルメジャーノチーズをすって加え、好みでパセリのみじん切りをのせる。これを冷まして、フランスパンがスープをしっかりと吸ったものもたまらなくおいしい。

トマトとショートパスタを加えて「ミネストローネ風」に。フジッリまたは、ファルファッレは、塩を加えた、たっぷりの熱湯で規定の時間ゆでる。野菜スープに火を入れて缶詰のホールトマトを崩しながら加えていく。

ここへゆでたショートパスタを加えてさらに煮込む。器によそって、好みでピザ用チーズをのせて余熱でチーズを溶かしていただく。

残ったコロッケが大変身

「コロッケそば」長ねぎはたっぷりの白髪ねぎにする。ポテトコロッケは、オーブントースターで温めておく。そば乾麺は指定の時間より若干かためにゆでて水で洗ってざるに上げる。本みりん、清酒は煮切る。ここへかつおだしベースのだし汁、しょうゆを合わせたつゆをつくり、そばを加えてさっと火を通したら器に移して、コロッケは4つに切ってそばの上のにのせ、さらに白髪ねぎをたっぷりのせ、好みで七味をかける。

「コロッケの卵とじ」は、おかずにも肴にもなる一品。玉ねぎはくし切りにして、先ほどと同じつゆを少し濃いめにして玉ねぎに火を通す。ここへコロッケを加えて、溶き卵をさっとかけて蓋をして弱火で1分ほど煮る。器によそい、のりをちぎってのせる。

(食文家)

業界ニュース

プレスリリース

平成24年11月6日
(社)全国米麦改良協会

平成25年産民間流通麦に係る入札結果の概要(抜粋)

- 平成25年産民間流通麦に係る入札について、第1回を10月3日(水)、第2回を10月16日(火)に、再入札を11月6日(火)に実施した。
- 第1回・第2回及び再入札を合わせた入札結果の概要は、次のとおり。

小 麦

29産地別銘柄 244,880トンが上場され、
29産地別銘柄 220,590トンが落札された。

- 小麦の産地別銘柄別の落札決定状況は、別紙のとおり。

平成25年産 民間流通麦の入札における落札決定状況(地域区分：全地区)(公表)

(単位：円、トン)

産地	銘 柄	税込			税別(参考)				上場数量 (6)	申込数量 (7)	落札 数量	落札 残数量	申込 倍率 (7)÷(6)
		基準 価格 (1)	指標価格 (加重 平均)(2)	対比 (2)÷(1)	基準 価格 (3)	指標 価格 (4)	前年産 指標価格 (5)	前年産 対比 (4)÷(5)					
北海道	春よ恋	113,252	97,815	86.4%	107,859	93,157	122,013	76.4%	8,390	8,870	8,190	200	1.1
北海道	キタノカオリ	82,278	76,536	93.0%	78,360	72,891	88,642	82.2%	2,040	2,640	2,040	0	1.3
北海道	きたほなみ	49,988	45,016	90.1%	47,608	42,872	53,855	79.6%	161,110	144,640	144,640	16,470	0.9
北海道	ゆめちから	82,278	83,959	102.0%	78,360	79,961	88,642	90.2%	9,160	10,960	8,380	780	1.2
北海道	はるきらり	113,252	92,490	81.7%	107,859	88,086	—	—	1,470	240	240	1,230	0.2
岩 手	ゆきちから	37,871	34,491	91.1%	36,068	32,849	—	—	970	560	560	410	0.6
宮 城	シラネコムギ	37,003	34,087	92.1%	35,241	32,464	39,865	81.4%	710	590	590	120	0.8
茨 城	さとのそら	28,953	30,546	105.5%	27,574	29,091	31,192	93.3%	4,110	4,070	3,330	780	1.0
栃 木	さとのそら	39,955	36,068	90.3%	38,052	34,350	—	—	790	360	360	430	0.5
群 馬	つるびかり	42,754	41,244	96.5%	40,718	39,280	46,061	85.3%	1,280	1,550	1,280	0	1.2
群 馬	きぬの波	52,802	58,082	110.0%	50,288	55,316	56,887	97.2%	420	960	420	0	2.3
群 馬	さとのそら	46,337	41,796	90.2%	44,130	39,806	49,921	79.7%	5,600	2,380	2,380	3,220	0.4
埼 玉	農林61号	42,025	38,262	91.0%	40,024	36,440	45,276	80.5%	3,830	3,800	3,510	320	1.0
埼 玉	あやひかり	38,139	40,927	107.3%	36,323	38,978	—	—	500	950	500	0	1.9
埼 玉	さとのそら	42,025	37,833	90.0%	40,024	36,031	—	—	1,050	1,300	910	140	1.2
岐 阜	農林61号	42,416	43,096	101.6%	40,396	41,044	45,697	89.8%	1,120	3,800	1,120	0	3.4
岐 阜	イワインダイチ	40,244	40,437	100.5%	38,328	38,511	43,358	88.8%	1,060	3,870	1,060	0	3.7
愛 知	農林61号	47,619	45,177	94.9%	45,351	43,026	51,302	83.9%	2,340	6,300	2,340	0	2.7
愛 知	イワインダイチ	45,021	44,586	99.0%	42,877	42,463	48,503	87.5%	2,060	6,060	2,060	0	2.9
滋 賀	農林61号	51,156	50,610	98.9%	48,720	48,200	55,113	87.5%	3,760	8,620	3,760	0	2.3
滋 賀	ふくさやか	51,156	46,684	91.3%	48,720	44,461	—	—	1,030	1,250	1,000	30	1.2
兵 庫	シロガネコムギ	42,090	40,754	96.8%	40,086	38,813	45,346	85.6%	740	1,270	740	0	1.7
香 川	さぬきの夢2009	59,045	64,949	110.0%	56,233	61,856	—	—	1,530	4,520	1,530	0	3.0
福 岡	シロガネコムギ	48,014	46,437	96.7%	45,728	44,226	51,728	85.5%	7,650	10,010	7,490	160	1.3
福 岡	チクゴイズミ	58,078	59,714	102.8%	55,312	56,870	62,570	90.9%	6,580	18,450	6,580	0	2.8
福 岡	ミナミノカオリ	48,879	53,766	110.0%	46,551	51,206	52,660	97.2%	1,870	4,260	1,870	0	2.3
佐 賀	シロガネコムギ	44,283	42,427	95.8%	42,174	40,407	47,708	84.7%	7,550	9,220	7,550	0	1.2
佐 賀	チクゴイズミ	52,175	57,392	110.0%	49,690	54,659	56,210	97.2%	5,190	13,900	5,190	0	2.7
大 分	チクゴイズミ	50,266	55,292	110.0%	47,872	52,659	54,154	97.2%	970	3,000	970	0	3.1
	合 計	53,196	49,333	92.7%	50,663	46,984	56,034	83.8%	244,880	278,400	220,590	24,290	1.1

(注) 1. 基準価格及び指標価格は円/1^ト当たりの価格で、消費税(地方消費税を含む)相当額を含めた額である。なお、参考として、当該相当額を除いた額を掲載してある。

2. 建値条件は、ばら、1等、産地倉庫在姿である。

3. 基準価格及び指標価格の「合計」欄は、本年産の産地・銘柄毎の基準価格又は指標価格を落札数量で加重平均したものである。

4. 小麦の基準価格は、前年産の指標価格に当該年産の第1回入札時点での輸入麦の政府売渡価格の変動率(0.884)を乗じた価格である。

(参考)

平成25年産民間流通麦の入札における落札状況

(第1回) (単位：円、トン)

麦種	産地	銘柄	地域区分	落札加重平均価格
小麦	北海道	春よ恋	全地区	101,692
小麦	北海道	キタノカオリ	全地区	74,450
小麦	北海道	きたほなみ	全地区	42,876
小麦	北海道	ゆめちから	全地区	83,929
小麦	北海道	はるぎらり	全地区	97,074
小麦	岩手	ゆきちから	全地区	33,210
小麦	宮城	シラネコムギ	全地区	33,012
小麦	茨城	さとのそら	全地区	28,129
小麦	栃木	さとのそら	全地区	34,350
小麦	群馬	つるびかり	全地区	39,231
小麦	群馬	きぬの波	全地区	55,316
小麦	群馬	さとのそら	全地区	39,878
小麦	埼玉	農林61号	全地区	36,820
小麦	埼玉	あやひかり	全地区	39,955
小麦	埼玉	さとのそら	全地区	36,025
小麦	岐阜	農林61号	全地区	41,258
小麦	岐阜	イワイノダイチ	全地区	38,596
小麦	愛知	農林61号	全地区	42,987
小麦	愛知	イワイノダイチ	全地区	42,792
小麦	滋賀	農林61号	全地区	48,571
小麦	滋賀	ふくさやか	全地区	44,424
小麦	兵庫	シロガネコムギ	全地区	38,931
小麦	香川	さぬきの夢2009	全地区	61,856
小麦	福岡	シロガネコムギ	全地区	44,459
小麦	福岡	チクゴイズミ	全地区	56,746
小麦	福岡	ミナミノカオリ	全地区	51,206
小麦	佐賀	シロガネコムギ	全地区	42,301
小麦	佐賀	チクゴイズミ	全地区	54,659
小麦	大分	チクゴイズミ	全地区	52,659

(第2回) (単位：円、トン)

麦種	産地	銘柄	地域区分	落札加重平均価格
小麦	北海道	春よ恋	全地区	97,887
小麦	北海道	キタノカオリ	全地区	71,301
小麦	北海道	きたほなみ	全地区	42,867
小麦	北海道	ゆめちから	全地区	76,389
小麦	岩手	ゆきちから	全地区	32,462
小麦	宮城	シラネコムギ	全地区	31,717
小麦	茨城	さとのそら	全地区	29,698
小麦	栃木	さとのそら	全地区	34,350
小麦	群馬	つるびかり	全地区	39,328
小麦	群馬	きぬの波	全地区	55,316
小麦	群馬	さとのそら	全地区	39,747
小麦	埼玉	農林61号	全地区	36,122
小麦	埼玉	あやひかり	全地区	38,000
小麦	埼玉	さとのそら	全地区	36,038
小麦	岐阜	農林61号	全地区	40,830
小麦	岐阜	イワイノダイチ	全地区	38,426
小麦	愛知	農林61号	全地区	43,065
小麦	愛知	イワイノダイチ	全地区	42,134
小麦	滋賀	農林61号	全地区	47,828
小麦	滋賀	ふくさやか	全地区	44,496
小麦	兵庫	シロガネコムギ	全地区	38,694
小麦	香川	さぬきの夢2009	全地区	61,856
小麦	福岡	シロガネコムギ	全地区	44,003
小麦	福岡	チクゴイズミ	全地区	56,994
小麦	福岡	ミナミノカオリ	全地区	51,206
小麦	佐賀	シロガネコムギ	全地区	38,509
小麦	佐賀	チクゴイズミ	全地区	54,659
小麦	大分	チクゴイズミ	全地区	52,659

(再入札)

(単位：円、トン)

麦種	産地	銘柄	地域区分	落札加重平均価格
小麦	北海道	春よ恋	全地区	87,133
小麦	北海道	はるぎらり	全地区	86,288

- (注) 1. 落札加重平均価格は円/1トン当たりの価格で、消費税(地方消費税を含む)相当額を除いた額である。
 2. 建値条件は、ばら、1等、産地倉庫在姿である。
 3. 落札加重平均価格は、本年産の産地、銘柄毎の落札加重平均を落札数量で加重平均したものである。

業界ニュース

★2012年産アメリカ小麦作柄報告会開催される

「2012年産アメリカ小麦の作柄報告会」が11月9日(金)に東京日本橋浜町のプラザマームで開催された。今回のアメリカ小麦連合会のチームは、日本滞在時間38時間と言う強行スケジュールの中、報告会は9日の10時過ぎから15時過ぎまでアメリカ小麦連合会の宇都宮駐日代表の進行のもと行われた。製粉関係者を初め、輸入関連商社、小麦関係業界からも約120名の出席者を数えた。

冒頭、ワシントン州小麦委員会のマイク ミラー理事の挨拶(農場紹介)のあと、アメリカ小麦連合会副社長・ポートランド事務所長のステイブ ワーシング氏から国際的な生産・需給見通し、ノースダコタ州立大学のシネイ・シムセック博士から春小麦、ネブラスカ州小麦委員会のロイス・シャネマン氏から冬小麦、ワシントン州小麦委員会のグレン・スクワイア氏からはソフト小麦についてそれぞれ報告があった。またカラマ・エクスポート・カンパニーのバド・リードナー氏から最近のトピックスとしてPNW(太平洋岸北西部)の港湾施設の能力増強と投資について話題提供があった。

ワーシング氏によると、今年のアメリカ穀物状況を表す『キーワード』は【Drought】(旱魃)と【Small Corn Crop】(コーンの生産減)の二つとのこと。今マスコミ等で取り上げられているアメリカの旱魃は、主にコーンの生産地帯の事であり、小麦ではHRWの生産地帯の南側の一部で影響は見られるものの、アメリカ全体の小麦生産量は61.8百万トンで前年比12%アップした。但し他の小麦輸出国の生産減による輸出量の増加、コーンの不作による小麦の飼料への転

用などが考えられ、農家の保有在庫は減る見通しであるとの説明があった。

春小麦(DNS)は、シーズンを通して温暖で乾燥気味の天候に恵まれ、播種は通常より3~4週間早く、生育期も順調に進み、収穫も約1か月早く特段の天候トラブルもなく終了した。生産量は前年比21%増の13.7百万トンであった。品質的にも69%がNo1、DNSに格付けされるなど良好。特徴としては、水分低め、硝子率高め、粗蛋白やや高めであるが、千粒重は前年並みであるが、過去5年平均には及ばなかった。

冬小麦(HRW)も春小麦ほどではないが、シーズンを通し天候に恵まれ、地域によって1~3週間早い収穫となった。生産量も前年比22%増の27.3百万トンが見込まれている。品質的にも良好で88%がNo1、HRWに格付けされている。特徴としては、春小麦同様水分低め、蛋白高めとなっている。

ソフト小麦の生産地域では土壌水分にも恵まれ、生育期、収穫期の天候も良かったが、生産量はホワイト全体では前年比17%減の7百万トンである。品質的にも春小麦・冬小麦同様良好で、水分低め、蛋白高めであるが、ケーキ特性など二次加工特性は、昨年並みとのこと。

リードナー氏によるとPNW地区(特にポートランドからシアトルのコロンビア川沿)はアメリカ西部の農産物の輸出基地で内陸部にはこれを支える農産物の輸送システムが整っている。2004年以降、農産物の輸出高は伸びており、最近では鉄道網や水路の再整備、新たな積出設備の建設などが行われてきているとの情報提供があった。

【東京・廣橋】



世界 (1) 2012/13年度の小麦は生産が6.55億トン、消費が6.79億トンで、主要輸出国の期末在庫

が大幅に減る。

国際穀物理事会(IGC)の2012/13年度小麦需給予測を[表1]に示した。生産は前年度比3,900万トン減の6.55億トン、消費は1,300万トン減の6.79億トン(うち、食用は400万トン増の4.65億トン)で、期末在庫は2,400万トン減の1.72億トン、主要輸出国期末在庫は1,900万トン減の5,000万トンの見込み。

(IGC-GMR・427/12)

(2) 2012/13年度の小麦貿易量は前年度比1,310万トン減の1.322億トン。

[表2]はIGCが予測した小麦貿易量で、2012/13年度は過去最高の前年度より1,310万トン減の1.322億トンである。トウモロコシの供給がタイトなので、飼料用低品質小麦の需要が強含みだが、供給量不足で貿易量は前年度の半分の1,100万トンと予想される。前年度に1,170万トン輸入したエジプトが在庫調整のため輸入量を1,000万トンに減らすので、食用貿易量は低めになる。年度前半の需要が停滞気味だが、黒海沿岸地域の輸出余力が低めなので、アメリカの輸出は前年度を上回る。ロシアは状況が良くない中で、前年度比58%減の900万トン輸出する。生産量が減るアルゼンチンとオーストラリアは輸出も減る。インドは在庫が多く、低

価格なので、輸出量が前年度の100万トンから500万トンに増える。

(IGC-GMR・427/12)

(3) デュラム小麦の2012/13年度は、生産が前年度比160万トン減の3,510万トン、貿易が35万トン減の710万トンで、3大輸出国の期末在庫は210万トンに減少。

IGCによるデュラム小麦の生産量、貿易量、及び主要輸出国の需給を[表3]、[表4]、及び[表5]に示した。2012/13年度生産量は前年度比160万トン減の3,510万トンである。カザフスタンとモロッコが減産だが、アルジェリア、カナダ、アメリカは生産量が増える。消費が3年連続で減少するが、モロッコとカザフスタンの供給量減が主因である。世界と3大輸出国の期末在庫はさらに減少する。

(IGC-GMR・427/12)

(4) インドとインドネシアで小麦の食用消費量が増えている。

小麦の2010/11年度の国別用途別消費量を[表6]に示した。食用消費はインドの伸びが大きく、インドネシアも増え、アジア全体で増加傾向だが、中国、エジプト、カザフスタンなどは少し減少した。工業用はEUが半分以上の1,040万トン、中国も310万トン消費した。

(IGC-Grain World Statistics 2011)

(5) アメリカとヨーロッパ4か国の食品安全指数が高い。

エコノミスト知能集団(EIU)は7月10日に世界食品安全指数(GFSI)を発表した。105の先進国と途上国を対象に、食品の供給量、入手しやすさ、及び品質について、それらに影響する計画、政策、及び実行面から細かく採点し、評価した。アメリカが最高の89.5、デンマークが

88.1、ノルウェーが88で、フランス、オランダがそれらに次いだ。最低はコンゴ民主共和国の18.4である。上位5か国は、十分な供給が確保され、高収入で他の支出に比べて食品への支出が低く、農業の研究開発に多く投資している。新興市場が急速に伸び、多種類の食品の需要が増しているが、供給への投資と生産性が追いついていない。国間の食品安全のギャップを埋めるには、弱点と対処法を知る必要があるという。

(EB・124/12)



アゼルバイジャン 輸入する小麦と粉の付加価値税を1年間免除。

政府は、2012年9月24日から1年間、輸入する小麦、メスリン(小麦とライ麦を混合したもの)、小麦粉、及び小麦粉とライ麦粉の混合粉の付加価値税の免除を決めた。

(World-Grain.com・Sept.25/12)



アメリカ (1) 2012-13年度の小麦は生産、消費、輸出共に増え、期末在庫が減少。

合衆国農務省10月11日発表による小麦需給を[表7]に、銘柄別需給を[表8]に示した。2012/13年度の生産量は収穫面積が多めで単収も平年並みの3.11トン/ヘクタールなので、前年度比13.5%増の6,175万トンである。食用消費は1.0%増の2,586万トン、国内消費計は13.2%増の3,641万トンである。作柄不良の国があるので、4.5%増の3,130万トンが輸出され、期末在庫は12.0%減の1,780万トンの見込みである。ハード・ウインター小麦の生産量が多いが、国内消費と輸出も多いので、期末在庫は531万トンに減る。ホワイト小麦は生産量が少ないので、期末在庫は166万トンに減る。デュラム小麦は64%増の223万トン生産されるが、輸出は68万トンに留まる。2012-13年度の平均農家手取り

価格は1ブッシェル当たり7.65~8.55ドルと予測され、前年度の7.24ドルより高い。

(USDA)

(2) 2012年9月の小麦生産者手取り価格は前月比45セント高、前年同月比95セント高だが、春小麦の上昇率は低い。

合衆国農務省発表の9月の全小麦平均生産者手取り価格(暫定値)は前月比45セント高の8.49ドル/ブッシェルで、前年同月比も95セント高である。冬小麦は8.51ドル(前月比59セント高、前年同月比1.51ドル高)、デュラム小麦は7.89ドル(同14セント高、及び2.96ドル安)、デュラム小麦を除く春小麦は8.52ドル(同25セント高、及び43セント高)である。

(MBN・91-16/12)

(3) ノースダコタ製粉の利益は前年度より低いが、高水準を維持。

州営のNorth Dakota Mill & Elevatorの2012年度(6月30日締め)の利益は800万ドルで、前年度の1,610万ドル、前々年度の1,320万ドルには及ばないが、これらに次ぐ高水準を維持した。粉の販売量は前年度比1%増の52.6万トンだったが、小麦価格の高騰が利益減の主因である。

(World-Grain.com・Sept.26/12)

(4) 8月のパン価格は下落。

合衆国労働省によると、2012年8月の型焼き白パン平均小売価格は1ポンド(約454グラム)当たり140.7セント(前月比2セント安、前年同月比6.7セント安)で、小麦全粒粉パンは190.5セント(同6.9セント安、及び6.9セント安)である。家庭用粉の平均小売価格は1ポンド当たり53.1セント(同1.5セント高、及び0.6セント安)である。

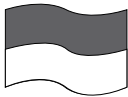
(MBN・91-15/12)



インド イランに輸出した小麦がなまぐさ黒穂病菌汚染でクレーム。汚染地区外からの輸出可能性を探る。

PunjabとHaryana両州からイランに輸出した小麦がkarnal bunt(なまぐさ黒穂病の一種)菌に汚染されていたとのクレームがあった。インド農務省もこれを認め、農産物の貿易相手国として重要なイランに対し、汚染されていないMadhya PradeshとRajasthan両州からの小麦輸出の可能性を検討している。

(World-Grain.com・Oct.9/12)



インドネシア 輸入小麦粉に20%の課税を検討中。

インドネシア製粉協会によると、製粉工場は20あり、総製粉能力は790万トンで、建設中の工場が4つある。年に約550万トンの輸入小麦を製粉しているが、小麦粉の輸入が約68万トンあり、価格が安いので製粉企業の経営を圧迫しているという。通商省は国際的なダンピング防止協定違反に当たるかを調査中で、決定までには90日くらいかかると思われるが、20%の輸入関税をかける方向で検討されている。

(World-Grain.com・Oct.8/12)



ウクライナ 11月15日から小麦輸出を禁止か。

小麦の収穫量が少ないため、政府は11月15日から輸出を禁止すると伝えられている。在庫確保のため、今年度の輸出量を50万トンまでとする方針。

(World-Grain.com・Oct.23/12)



オーストラリア ADM社がGrainCorp社取得へ。

10月19日、Archer Daniels Midland社はGrainCorp社の株の14.9%を取得したと発表した。さらにADM社は買収の方向で動いている。

(World-Grain.com・Oct.19, 22/12)



オーストリア 2012年産小麦は雨不足で収量が低いが、品質はまずまず。

2012年産普通小麦は作付面積が前年比1.7%増の28.5万ヘクタールだが、収量が29.6%減の4.22トン/ヘクタールなので、生産量は28.3%減の120.2万トンである。品質を[表9]に示した。乾物量ベース蛋白量は15.0% (水分13.5%ベースで13.0%)で、前年の13.4%より高い。パン体積は前年より大きい。平均フォーリングナンバーは321秒で、59%が200秒以上だが、低いものも多い。デュラム小麦生産量は前年比45%減の4.3万トンである。

(MM・149-19/12)



韓国 小麦増産と海外備蓄を計画。

農業省の2012年9月19日発表によると、議会の承認が必要だが、高騰する穀物と油糧種子価格に対応するため、来年の小麦と大豆の国内生産量を増やす計画だという。さらに、海外でトウモロコシ、小麦、大豆を合計で50万トン(国内消費の5%相当)在庫する。

(IGC-GMR・426/12)



**サウジアラビア 小麦の戦略的
備蓄量増加のため、貯蔵設備を増
設。**

2012年8月27日、穀物サイロ・製粉機構は今後3年間に穀物貯蔵能力を27%増やして320万トンにすると発表した。小麦の戦略的備蓄量を現在の10か月分から1年分に増やすことが目的である。

(IGC-GMR・426/12)



**ドイツ (1) 2012年産小麦の
生産量は前年比4.3%減、過去5年
平均比8.2%減の2,365万トン。**

2012年産麦類の作付面積と生産量を[表10]に示した。冬小麦の作付面積は前年比8.7%減の290万ヘクタール、デュラム小麦も21.4%減の1ヘクタールだが、デュラムを除く春小麦の作付面積は前年比154%増の15ヘクタールである。ライ小麦の作付面積は前年より2.6%、過去5年平均より5.3%少ない。小麦全体の平均収量は7.33トン/ヘクタールで、生産量は前年比1.5%減の2,245万トンである。ほとんどが冬小麦で、春小麦は94万トンに増えたが、デュラム小麦は6万トンと少ない。ライ麦は減少傾向だったが久しぶりに作付面積が前年比15.7%増で、生産量は前年比49.7%増の377万トンになった。ライ小麦の生産量も前年比12.6%増の226万トンである。

(MM・149-18/12)

(2) 2012年産小麦の製粉工場出回り品は平年並みの品質。

2012年産小麦で製粉工場出回り品の平均品質を[表11]に示した。ほぼ平年並みである。

(MM・149-19/12)

(3) 9月の小麦価格、8月の小麦粉価格は上昇。

[表12]は国内主要市場平均の9月の小麦、ライ麦、及びふすまの価格である。小麦は上昇傾向で、前年同月よりも高いが、パン用ライ麦は前年同月より安い。小麦ふすまは前年同月より高く、上昇傾向である。[表13]は8月の小麦粉とライ麦粉の製粉工場出荷価格指数で、上昇気配である。[表14]は家庭用小麦粉(タイプ405)の消費者価格で、銘柄品は上昇傾向で、格安品も前年同月より高い。

(MM・149-19/12)



**ボスニア 外国の銀行からの借
金で小麦を3万トン購入。**

政府は小麦不足対策と食料価格安定のため、外国の銀行から1,000万ユーロを借り、3万トンの小麦を輸入する。銀行名は公表されていないが、契約は成立しているという。借入は最低利率で3年間、2年の支払猶予期間付きである。生産量は30万トンを超える年もあるが、2010年から早魃が続き、2011/12年度は16万トンである。小麦粉生産量は13万トン強なので、足りない。

(World-Grain.com・Oct.11, Oct.17/12)



**南アフリカ タイガーブランズ
社がナイジェリアのDangote製粉
の株の63.35%を取得。**

本誌2012年6月号に両社の関係を報じたが、10月1日のDangote Industries社(本社はナイジェリアのラゴス)発表によると、同社はDangote製粉の株の63.35%をTiger Brands社に売却した。Tiger Brands社の本社はSandtonにあり、南アフリカを中心に消費者向け食品を製造、販売する大手食品会社で、アフリカの28か国で事業を展開している。

(World-Grain.com・Oct.3/12)



**モロッコ (1) 普通小麦の輸入
関税を3か月間停止。**

政府は普通小麦の輸入関税を10月1日から12月31日まで一時的に停止する。国内市場への供給状況改善を狙った。これと並行し、穀物・豆類産業局(ONCIL)はこの期間に輸入する普通小麦について、輸入価格が標準価格(2,600ディルハム(300米ドル)/トン)を超える分の85%を政府が支払うと発表した。

(IGC-GMR・426/12)

(2) 製粉工場は多いが4グループが中心。国内産と輸入小麦を使用し、デュラム小麦の挽砕量も多い。

旱魃で2012-13年度の小麦生産量は350万トン(前年度は580万トン)なので、輸入量は510万トン(前年度は350万トン)の見込みである。小麦生産量にはデュラム小麦が100万トン(前年度は170万トン)含まれる。全国製粉協会(Fédération Nationale de la Minoterie)によると、製粉工場は180あり、うち120工場が普通小麦を挽いてパン、ビスケット、及びペストリー用の粉を製造し、60工場がデュラム小麦からパスタとクスクス用のセモリナを製造している。製粉工場の多くは小麦生産地に近いカサブランカからフェスまでの地区にある。2009年末の製粉能力は789万トンで、稼働率は58.3%と推定される。モロッコの市場アナリスト(BCE)によると、普通小麦製粉工場は130あり、うち80工場が工業規模で、カサブランカ、ラバット、フェスなどの都市部にあるが、古くからの小規模な製粉所が6,000あるという。統廃合が進み、製粉業界はGromic、Millex、Fandy、及びSomacerealという4大グループが支配し、小麦も輸入する。2011-12年度の普通小麦の輸入の65%はフランスから、デュラム小麦の51%はカナダからである。財務省と農務省の監督下の穀物・豆類産業

局(ONICL)が市場の組織化と緊急用備蓄の管理を担当する。BCEによると、約100万トンの「国民の粉」という名称の80%歩留り粉を低価格で低所得者層に供給し、そのための小麦を国内又は輸入業者から購入する。パンの多くは手づくりベーカリー製品だが、工業規模工場の製品が伸びている。ビスケットとケーキの消費は安定している。輸入小麦の使用比率は、標準及び配合用粉が60~70%、上級パン用粉が13~20%、ビスケット用粉が7~8%である。

(WG・30-9/12)



ヨーロッパ連合 輸送燃料中での穀物からのバイオ燃料の使用上限を5%に制限へ。

2012年9月17日の共同会見によると、気候・エネルギー長官は2010年までに輸送燃料中の穀物を原料としたバイオ燃料の使用比率の上限を5%に制限する法案を提出した。

(IGC-GMR・426/12)



ロシア グレンコア社が黒海沿岸のタマン港の穀物ターミナルを取得。

Glencore International社(スイスを本拠とする一次産品大手)の10月2日発表によると、現地子会社を通してKernel持株会社と50:50の合弁会社を設立し、黒海沿岸のTaman港の穀物輸出ターミナルを取得した。年間300万トンの穀物の取扱い能力があり、年間を通してロシアの穀物を輸出可能である。同社によると、世界市場でのロシア穀物の競争力を増し、ヨーロッパ、中東、及びアフリカの顧客のニーズへの対応が可能になるという。

(World-Grain.com・Oct.3/12)

[表1] 世界の小麦需給

(百万トン)

	08/09	09/10	10/11	11/12(推定)	12/13(予測)
期初在庫	132	173	200	194	196
生産	685	679	653	694	655
供給計	817	852	853	889	851
消費計	645	652	659	692	679
うち飼料用	113	117	119	146	131
工業用	18	19	19	19	19
食用	447	452	456	461	465
期末在庫	173	200	194	196	172
前年度比	+41	+27	-6	+2	-24
主要輸出国*	69	79	73	69	50
貿易	137	128	126	145	132

(2012年10月25日現在)*はアルゼンチン、オーストラリア、カナダ、EU、カザフスタン、ロシア、ウクライナ、アメリカ(IGC)

[表2] 世界の小麦貿易量

(百万トン)

輸 入 国		09/10	10/11	11/12(推定)	12/13(予測)
ヨーロッパ	アルバニア	0.3	0.3	0.3	0.3
	EU-27	5.1	4.7	7.2	5.7
	ノルウェー	0.4	0.3	0.4	0.3
	スイス	0.4	0.4	0.3	0.4
	その他	0.3	0.3	0.4	0.4
	計	6.5	5.9	8.6	7.1
CIS	アゼルバイジャン	1.0	1.3	1.5	1.4
	ベラルーシ	T	T	T	0.1
	グルジア	0.7	0.6	0.8	0.8
	ロシア	0.1	T	T	0.8
	ウクライナ	T	T	0.1	T
	ウズベキスタン	1.7	1.6	2.7	1.6
	その他	1.8	1.8	2.4	2.2
	計	5.5	5.4	7.5	6.8
北・中 アメリカ	キューバ	0.7	0.8	0.8	0.8
	メキシコ	3.1	3.4	5.1	3.6
	アメリカ	2.3	2.1	2.5	2.8
	その他	2.9	2.9	3.4	2.8
	計	8.9	9.2	11.8	10.0

輸 入 国		09/10	10/11	11/12(推定)	12/13(予測)	
南アメリカ	ボリビア	0.4	0.3	0.3	0.4	
	ブラジル	6.7	6.6	7.0	7.0	
	チリー	0.7	0.6	1.1	0.8	
	コロンビア	1.4	1.3	1.6	1.4	
	エクワドル	0.5	0.6	0.6	0.5	
	ペルー	1.6	1.8	1.7	1.7	
	ベネズエラ	1.5	1.4	1.7	1.5	
	その他	0.1	0.1	0.1	0.2	
	計	13.1	12.7	14.0	13.4	
近東アジア	イラン	3.0	0.1	2.2	1.5	
	イラク	3.9	3.5	3.9	3.7	
	イスラエル	1.8	1.3	2.0	1.7	
	ヨルダン	0.9	0.9	0.8	1.0	
	レバノン	0.5	0.4	0.5	0.5	
	サウジアラビア	1.8	1.7	2.9	2.3	
	シリア	1.8	0.4	0.8	0.9	
	トルコ	3.3	3.5	4.4	3.8	
	UAE	1.4	0.8	1.9	1.3	
	イエメン	2.7	2.6	2.6	2.6	
	その他	0.7	0.9	1.0	0.8	
	計	21.8	16.1	22.9	19.9	
極東アジア	太平洋アジア	中国	1.4	1.0	3.0	1.0
		インドネシア	5.4	6.6	6.4	6.5
		日本	5.5	6.0	6.2	5.9
		北朝鮮	0.1	0.2	0.3	0.2
		韓国	4.4	4.9	5.1	4.6
		マレーシア	1.1	1.4	1.4	1.3
		フィリピン	3.0	3.2	4.0	3.2
		シンガポール	0.3	0.3	0.4	0.3
		台湾	1.2	1.3	1.5	1.3
		タイ	1.5	1.9	2.5	2.1
		ベトナム	1.9	2.5	2.7	2.5
		その他	0.9	0.7	0.8	0.9
			計	26.9	30.1	34.2
	南アジア	バングラデシュ	3.5	3.4	1.7	3.2
		インド	0.3	0.1	T	0.1
		パキスタン	0.2	0.1	0.1	0.2
		スリランカ	1.2	1.1	1.0	1.1
その他		2.2	2.1	1.8	1.8	
	計	7.3	6.7	4.6	6.3	
	計	34.2	36.8	38.8	36.2	

輸 入 国		09/10	10/11	11/12(推定)	12/13(予測)	
ア フ リ カ	北 ア フ リ カ	アルジェリア	5.1	6.4	6.3	5.1
		エジプト	10.2	10.4	11.7	10.0
		リビア	2.1	1.4	1.6	1.6
		モロッコ	2.3	3.9	3.1	5.1
		チュニジア	1.5	1.8	1.5	1.6
		計	21.3	23.8	24.2	23.3
	サ ハ ラ 以 南	コートジボワール	0.6	0.5	0.5	0.5
		エチオピア	1.2	0.3	1.4	0.7
		ケニア	1.3	0.7	1.3	1.3
		ナイジェリア	4.0	4.0	3.9	4.0
		南アフリカ	1.6	1.7	1.6	1.5
		スーダン	1.8	1.6	2.4	1.8
		その他	6.2	5.4	7.0	6.0
		計	16.6	14.2	18.1	15.8
	計	37.9	38.0	42.2	39.1	
オセアニア	ニュージーランド	0.3	0.4	0.6	0.3	
	その他	0.4	0.4	0.5	0.4	
	計	0.7	0.8	1.0	0.7	
世 界 計		128.0	125.6	145.3	132.2	

注：年度は7月～6月、Tは5万トン以下
(2012年10月25日現在)

(百万トン)

輸 出 国	09/10	10/11	11/12(推定)	11/12(予測)
アルゼンチン	5.1	7.6	11.4	7.0
オーストラリア	13.7	18.5	23.1	20.8
カナダ	18.3	16.3	18.2	18.8
EU-27	20.8	22.1	15.6	16.8
カザフスタン	8.0	5.6	10.7	7.0
ロシア	18.8	4.0	21.6	9.0
ウクライナ	9.3	4.3	5.4	5.4
アメリカ	24.2	35.7	27.9	30.8
中国	0.4	0.4	0.5	1.0
インド	—	—	1.0	5.0
パキスタン	0.3	1.3	0.5	1.3
メキシコ	0.9	0.8	1.1	0.9
シリア	T	T	T	T
トルコ	4.0	2.4	3.3	3.8
その他	4.1	6.6	4.9	4.6
世 界 計	128.0	125.6	145.3	132.2

注：年度は7月～6月、Tは5万トン以下
(2012年10月25日現在)

(IGC)

[表3] 世界のデュラム小麦生産量

(百万トン)

国	09/10	10/11	11/12(推定)	12/13(予測)
EU-27	8.7	9.1	8.2	8.0
フランス	2.1	2.5	2.1	2.4
ギリシャ	1.3	1.3	0.9	0.7
イタリア	3.6	4.1	3.9	4.2
スペイン	1.4	0.9	0.9	0.4
カザフスタン	2.6	1.7	3.0	1.6
カナダ	5.4	3.0	4.2	4.4
メキシコ	2.2	2.2	2.2	2.1
アメリカ	3.0	2.9	1.4	2.2
アルゼンチン	0.2	0.3	0.2	0.2
シリア	1.8	1.6	1.7	1.5
トルコ	3.1	2.9	3.0	3.0
インド	1.0	1.0	1.1	1.2
アルジェリア	2.9	2.2	2.5	3.0
リビア	0.1	0.1	0.1	0.1
モロッコ	1.9	1.6	1.7	1.0
チュニジア	1.4	0.6	1.2	1.3
オーストラリア	0.5	0.5	0.6	0.5
その他	6.2	5.3	5.6	5.1
世界計	40.9	34.9	36.7	35.1

(2012年10月25日現在)

(IGC)

[表4] 世界のデュラム小麦(セモリナを含む)貿易量

(千トン)

国	09/10	10/11	11/12(推定)	12/13(予測)
EU-27	2,159	1,928	1,850	1,900
アメリカ	534	474	620	650
チリ	55	16	6	10
ペルー	136	119	100	120
ベネズエラ	349	403	410	420
日本	234	230	280	240
アルジェリア	1,534	1,335	1,800	1,300
リビア	25	10	21	10
モロッコ	548	773	700	900
チュニジア	476	687	500	500
ナイジェリア	115	165	115	120
その他/不詳	1,387	1,190	989	910
世界計	7,553	7,338	7,450	7,100
(その内のセモリナ)	263	360	360	350

国		09/10	10/11	11/12(推定)	12/13(予測)
輸出	オーストラリア	246	233	400	230
	カナダ	3,675	3,117	3,850	4,000
	EU-27	1,054	2,060	1,400	900
	(その内のセモリナ)	200	200	200	200
	メキシコ	169	30	200	50
	シリア	892	770	920	800
	トルコ	428	20	5	5
	アメリカ	1,045	1,051	550	940

(2012年10月25日現在)

(IGC)

[表5] デュラム小麦主要輸出国での需給

(百万トン)

国	年度	期初 在庫	生産	輸入	供給 計	消費			輸出 ^{a)}	期末 在庫
						食用	飼料用	計		
カナダ (8月/7月)	2010/11	2.7	3.0	T	5.7	0.3 ^{b)}	0.5 ^{c)}	0.9	3.3	1.6
	2011/12推定	1.6	4.2	T	5.8	0.3 ^{b)}	0.5 ^{c)}	0.8	3.6	1.4
	2012/13予測	1.4	4.4	T	5.8	0.3 ^{b)}	0.4 ^{c)}	0.8	3.9	1.1
EU-27 (7月/6月)	2010/11	1.2	9.1	1.9	12.2	7.0	0.3	7.9	3.7	0.5
	2011/12推定	0.5	8.2	1.9	10.6	6.9	0.2	7.3	3.0	0.3
	2012/13予測	0.3	8.0	1.9	10.2	6.8	0.2	7.3	2.5	0.3
アメリカ (6月/5月)	2010/11	1.0	2.9	0.9	4.8	2.4	T	2.5	1.2	1.0
	2011/12推定	1.0	1.4	1.0	3.3	1.8	T	2.0	0.7	0.7
	2012/13予測	0.7	2.2	1.2	4.1	2.2	T	2.3	1.0	0.8
3大輸出国 計	2010/11	4.9	15.0	2.8	22.7	9.7	0.9	11.4	8.2	3.1
	2011/12推定	3.1	13.7	2.9	19.7	8.8	0.5	10.0	7.3	2.4
	2012/13予測	2.4	14.6	3.1	20.1	9.2	0.5	10.4	7.4	2.1
世界計	2010/11	10.1	34.9	7.3	45.0	29.7	2.7	37.6	7.3	7.4
	2011/12推定	7.4	36.7	7.5	44.1	29.4	2.0	36.5	7.5	7.6
	2012/13予測	7.6	35.1	7.1	42.7	29.1	1.9	35.7	7.1	7.0

注a) セモリナを含む、 b) 工業用を含む、 c) 廃棄分ときょう雑物を含む

(2012年10月25日現在)

(IGC)

[表6] 世界の小麦消費量

(百万トン)

地域・国名		食用		工業用	飼料用	種子用	その他用	総消費量		
		2009/10	2010/11	2010/11	2010/11	2010/11	2010/11	2009/10	2010/11	
ヨーロッパ	EU-27	54.0	54.2	10.4	51.5	5.2	1.8	128.5	123.1	
	スイス	0.6	0.6	0.1	0.3	T	T	0.9	0.9	
	計	58.1	58.1	10.6	52.1	5.4	2.0	134.3	128.1	
CIS	カザフスタン	2.6	2.0	T	1.5	1.5	1.0	7.2	6.0	
	ロシア	16.6	16.6	0.3	15.9	4.6	1.3	39.4	38.6	
	ウクライナ	5.8	5.8	0.2	3.1	1.3	1.0	11.8	11.4	
	ウズベキスタン	4.3	4.1	0.1	2.3	0.3	1.2	7.7	8.0	
	計	35.6	34.8	0.8	24.9	8.3	6.1	78.1	74.9	
北中アメリカ	カナダ	2.8	2.7	0.8	3.2	1.0	—	7.2	7.7	
	メキシコ	4.9	5.0	0.1	1.0	0.2	0.1	6.3	6.4	
	アメリカ	24.5	24.6	0.6	3.6	1.9	—	31.0	30.7	
	計	34.8	35.1	1.5	8.0	3.1	0.6	47.8	48.2	
南アメリカ	アルゼンチン	3.7	3.7	0.1	0.3	0.4	—	4.4	4.5	
	ブラジル	9.4	9.5	0.1	0.2	0.3	0.6	10.8	10.6	
	チリ	1.9	1.9	—	0.2	T	T	2.1	2.2	
	コロンビア	1.3	1.2	—	—	T	0.1	1.4	1.4	
	ペルー	1.4	1.4	0.1	0.1	T	0.1	1.8	1.8	
	ベネズエラ	1.5	1.4	—	—	T	T	1.5	1.4	
	計	20.6	20.4	0.3	0.9	0.9	1.1	23.6	23.6	
近東アジア	イラン	12.3	12.2	0.2	0.4	0.4	1.9	15.4	15.1	
	イラク	4.3	4.5	0.1	0.7	0.4	0.4	5.8	6.2	
	イスラエル	1.0	0.9	—	0.7	0.1	—	1.9	1.6	
	サウジアラビア	2.3	2.3	—	0.1	0.1	0.2	2.9	2.7	
	シリア	3.4	3.4	0.2	0.4	0.3	0.5	5.0	4.8	
	トルコ	13.5	13.8	0.3	1.1	1.7	1.3	17.7	18.2	
	イエメン	2.6	2.7	—	0.1	T	0.1	2.9	2.8	
	計	41.4	41.6	0.9	3.6	3.1	4.8	54.4	54.0	
極東アジア	太平洋アジア	中国	89.0	88.0	3.1	15.0	4.4	3.6	106.5	114.1
		インドネシア	5.2	6.0	—	0.1	—	0.1	5.4	6.2
		日本	4.9	5.2	0.4	0.4	T	0.1	5.7	6.1
		韓国	2.2	2.3	0.1	2.3	T	0.1	4.5	4.8
		マレーシア	1.0	1.1	—	0.1	T	—	1.1	1.2
		フィリピン	2.1	2.1	—	0.9	—	0.1	3.0	3.1
		タイ	0.8	1.0	—	0.7	T	0.1	1.3	1.8
		ベトナム	1.0	1.1	—	1.2	—	0.1	1.9	2.4
		計	108.6	109.5	3.7	21.2	4.5	4.3	132.3	143.1
	南アジア	アフガニスタン	4.8	4.7	—	0.1	0.1	0.8	6.3	5.8
		バングラデシュ	3.7	3.8	—	—	0.1	0.3	4.1	4.2
		インド	68.6	73.1	0.2	1.0	4.2	3.6	77.1	82.1
		パキスタン	20.7	20.7	0.1	0.4	1.0	0.8	23.3	22.9
		計	99.4	103.8	0.4	1.7	5.6	5.7	113.2	117.2
		計	207.9	213.3	4.1	22.9	10.1	10.0	245.5	260.3

地域・国名			食用		工業用	飼料用	種子用	その他用	総消費量	
			2009/10	2010/11	2010/11	2010/11	2010/11	2010/11	2010/11	2009/10
ア フ リ カ	北 ア フ リ カ	アルジェリア	7.4	7.6	0.1	0.3	0.2	0.6	8.7	8.9
		エジプト	14.8	14.5	0.2	1.6	0.3	1.1	18.0	17.7
		リビア	1.8	1.8	T	—	T	0.2	2.0	2.0
		モロッコ	6.4	6.6	0.1	0.2	0.5	1.1	8.3	8.5
		チュニジア	2.2	2.4	0.2	0.2	0.1	0.1	2.8	2.9
		計	32.6	32.8	0.7	2.3	1.2	3.1	39.8	40.0
	サハラ 以 南	エチオピア	2.8	2.8	—	0.2	0.1	0.2	3.2	3.3
		ケニア	0.9	1.0	—	70.0	T	0.1	1.0	1.2
		ナイジェリア	4.0	3.9	—	0.1	T	0.1	4.3	4.1
		南アフリカ	3.0	2.8	—	T	0.1	0.1	3.2	2.9
		スーダン	1.9	1.7	—	—	T	0.3	2.1	2.1
		計	17.8	16.9	0.2	0.4	0.4	2.0	20.7	19.7
	計		50.3	49.7	0.7	2.7	1.6	5.0	60.5	59.7
	オ セ ア ニ ア	オーストラリア	2.1	2.1	0.4	2.7	0.7	—	4.9	5.9
計		2.6	2.7	0.6	2.9	0.7	0.1	5.8	7.0	
世 界 計			452.1	456.1	19.3	118.6	33.6	30.3	652.6	658.0

(IGC)

[表7] アメリカの小麦需給

(千トン)

項 目		2009-10	2010-11	2011-12	2012-13	
播種面積(百万ヘクタール)		23.96	21.69	22.02	22.54	
収穫面積(百万ヘクタール)		20.19	19.26	18.49	19.83	
単収(トン/ヘクタール)		2.99	3.12	2.79	3.11	
供 給	期初在庫	17,881	26,562	23,460	20,221	
	生産	60,364	60,065	54,404	61,752	
	輸入	3,239	2,640	3,048	3,538	
	計	81,456	89,240	80,939	85,511	
需 要	国内 消費	食 用	25,011	25,202	25,610	25,855
		種 子 用	1,878	1,932	2,068	1,987
		飼 料 用	4,082	3,592	4,463	8,573
	計	30,971	30,699	32,169	36,414	
	輸 出		23,922	35,081	28,576	31,298
	計		54,921	65,780	60,718	67,712
期 末 在 庫		26,562	23,460	20,221	17,799	
平均農家価格(ドル/ブッシェル)		4.87	5.70	7.24	7.65-8.55	

(2012年8月10日現在)

(USDA)

[表8] アメリカの小麦銘柄別需給

(百万トン)

銘柄		HRW		HRS		SRW		White		Durum		計	
年度		11/12	12/13	11/12	12/13	11/12	12/13	11/12	12/13	11/12	12/13	11/12	12/13
供給	期初在庫	10.51	8.63	5.03	4.11	4.65	5.03	2.31	1.74	0.95	0.68	23.46	20.22
	生産	21.23	27.32	10.83	13.74	12.46	11.43	8.55	7.05	1.36	2.23	54.40	61.75
	計	31.73	35.98	16.82	19.08	17.99	17.28	11.05	9.04	3.32	4.14	80.94	85.51
需要	国内消費	12.30	15.84	6.12	7.92	8.46	7.51	3.37	2.75	1.91	2.39	32.17	36.41
	輸出	10.80	14.83	6.59	6.53	4.49	4.63	5.93	4.63	0.73	0.68	28.58	31.30
	計	23.11	30.67	12.71	14.45	12.95	12.14	9.31	7.38	2.64	3.08	60.72	67.71
期末在庫		8.63	5.31	4.11	4.63	5.03	5.14	1.74	1.66	0.68	1.06	20.22	17.80

(2012年10月11日現在)

(USDA)

[表9] 2012年産オーストラリア小麦の品質

品質項目	2012年産	2010年産
蛋白 (乾物量%)	15.0	13.4
グルテン (%)	34.9	30.8
沈降価 (ml)	61	54
フォーリングナンバー (秒)	321	319
パン体積 (ml/100g)	732	670

(MM)

[表10] ドイツ産麦類の作付面積、生産量

	作付面積						生産量				
	2006~2011 (平均値) (暫定値)	2011 (千ha)	2012 (暫定値) (千ha)	対比		2006~2011 (平均値) (千トン)	2011 (千トン)	2012 (暫定値) (千トン)	対比		
				06~11 (%)	11 (%)				06~11 (%)	11 (%)	
冬小麦(デュラムを除く)	3,127	3,173	2,897	-7.4	-8.7	23,366	22,396	21,443	-8.2	-4.3	
春小麦(デュラムを除く)	43	60	153	+257.2	+154.4	225	314	944	+320.2	+200.9	
デュラム小麦	12	15	12	-1.3	-21.4	61	73	64	+4.6	-12.0	
小麦計	3,182	3,248	3,061	-3.8	-5.7	23,652	22,783	22,451	-5.1	-1.5	
ライ麦	663	614	710	+7.1	+15.7	3,271	2,521	3,773	+17.3	+49.7	
大麦	1,837	1,598	1,683	-8.4	+5.3	11,424	8,734	10,351	-9.4	+18.5	
エン麦	165	143	146	-11.6	+1.5	790	627	721	-8.7	+15.0	
ライ小麦	394	383	373	-5.3	-2.6	2,338	2,004	2,257	-3.5	+12.6	

(2012年9月20日現在)

(MM)

[表11] 2012年ドイツ産小麦の製粉工場出回り品の品質

	2012年		2011年 平均値	過去5年の 平均値
	平均値	範囲		
灰分 (乾物量%)	1.59	1.16-1.85	1.53	1.63
硬度 (NIR)	54	40-62	55	54
蛋白 (乾物量%)	13.5	10.8-16.5	13.5	13.5
沈降価 (ml)	55	26-75	55	54
ウエットグルテン (%)	28.3	20.4-37.0	27.6	28.1
グルテン指数	76	38-99	79	80
全粒粉フォーリングナンバー (秒)	319	179-404	304	318
タイプ550の粉歩留 (%)	77.7	71.6-82.2	79.8	78.9
RTM法パン吸水 (%)	59.7	51.6-66.1	60.2	59.2
RTM法パン体積 (ml/100g)	648	500-767	635	650

(MM)

[表12] ドイツの小麦・ライ麦・ふすまの価格

品目	2012年				2011年
	9/24~9/30		9/17~9/23		9/26~10/2
	Euro/トン	市場数	Euro/トン	市場数	Euro/トン
Aグループ 高品質小麦	256.00	6	256.42	6	206.50
パン用小麦	253.36	7	251.08	6	196.29
パン用ライ麦	222.40	5	219.70	5	229.70
飼料用小麦	245.33	6	247.92	6	190.92
小麦ふすま(バラ)	170.36	7	168.50	6	128.00

(MM)

[表13] ドイツの業務用製粉製品の製粉工場出荷価格指数

品目	2012年8月	2012年7月	2011年8月
小麦粉	142.4	138.9	145.3
ライ麦粉	144.2	142.3	148.1

(ドイツ連邦統計局)

[表14] ドイツの家庭用小麦粉消費者価格

(Euro/キログラム)

品目	2012年8月	2012年7月	2011年8月
タイプ405の格安小麦粉	0.45	0.45	0.25
タイプ405の銘柄品小麦粉	0.92	0.87	0.84

(AMI 消費者価格一覧表局)

製粉工場における玄麦および小麦粉の月別需給動向(24年度)

(単位：千トン、前年比%)

年月	玄				麦				小				粉					
	買入数量	対前年比	加工量	対前年比	月末在庫	対前年比	生産量	対前年比	販売量	対前年比	月末在庫	対前年比	生産量	対前年比	販売量	対前年比	月末在庫	対前年比
平成18年度	6,271	103.8	5,982	99.2	751	162.9	4,599	99.5	4,594	99.5	287	101.8	4,599	99.5	4,594	99.5	287	101.8
平成19年度	5,901	94.1	6,037	100.9	616	82.0	4,684	101.8	4,677	101.8	293	102.1	4,684	101.8	4,677	101.8	293	102.1
平成20年度	5,748	97.4	5,848	96.9	517	83.9	4,564	97.4	4,575	97.4	282	96.3	4,564	97.4	4,575	97.8	282	96.3
平成21年度	5,802	101.1	5,916	101.4	405	78.2	4,612	101.1	4,620	101.1	274	97.1	4,612	101.1	4,620	101.0	274	97.1
平成22年度	6,559	113.0	6,041	102.1	924	228.1	4,725	102.4	4,690	101.5	308	112.6	4,725	102.4	4,690	101.5	308	112.6
平成23年度	6,362	97.0	6,040	100.0	1,246	134.9	4,708	99.6	4,700	100.2	316	102.6	4,708	99.6	4,700	100.2	316	102.6
23.4	533	105.5	564	103.9	893	242.8	441	103.1	434	102.2	315	114.0	441	103.1	434	102.2	315	114.0
5	470	88.0	512	104.7	855	207.3	394	102.5	390	104.9	320	110.4	394	102.5	390	104.9	320	110.4
6	523	112.3	526	106.8	852	220.9	407	105.1	416	107.1	311	107.6	407	105.1	416	107.1	311	107.6
7	573	109.4	461	94.1	964	229.9	354	92.8	350	90.8	316	110.5	354	92.8	350	90.8	316	110.5
期計	2,100	103.5	2,060	102.2	1,396	143.6	1,597	101.0	1,590	101.3	306	103.4	1,597	101.0	1,590	101.3	306	103.4
8	720	140.0	455	96.2	1,229	267.0	351	95.8	365	101.0	302	103.8	351	95.8	365	101.0	302	103.8
9	580	45.4	499	101.5	1,309	105.1	384	100.6	387	100.4	298	104.2	384	100.6	387	100.4	298	104.2
10	600	255.4	497	99.1	1,412	144.1	385	97.7	387	101.2	297	99.5	385	97.7	387	101.2	297	99.5
11	507	99.5	523	101.2	1,396	143.6	410	101.5	401	98.6	306	103.4	410	101.5	401	98.6	306	103.4
期計	2,406	94.9	1,974	99.5	1,531	144.9	1,531	98.9	1,541	100.2	298	103.2	1,531	98.9	1,541	100.2	298	103.2
12	453	94.6	542	98.7	1,307	144.9	428	99.8	435	100.0	298	103.2	428	99.8	435	100.0	298	103.2
24.1	356	83.6	452	98.0	1,211	139.7	354	98.1	336	97.0	317	104.3	354	98.1	336	97.0	317	104.3
2	489	86.7	483	100.8	1,217	127.9	380	102.0	373	101.5	324	104.8	380	102.0	373	101.5	324	104.8
3	558	106.4	529	95.8	1,246	134.9	418	96.3	426	97.9	316	102.6	418	96.3	426	97.9	316	102.6
期計	1,856	93.1	2,006	98.3	1,246	134.9	1,580	99.0	1,570	99.1	304	96.3	1,580	99.0	1,570	99.1	304	96.3
24.4	336	63.1	512	90.8	1,071	119.9	405	91.8	400	92.2	321	101.8	405	91.8	400	92.2	321	101.8
5	393	83.6	484	95.2	980	114.6	379	96.2	383	98.4	317	99.1	379	96.2	383	98.4	317	99.1
6	540	103.2	492	93.5	1,028	120.6	384	94.3	373	89.7	327	105.3	384	94.3	373	89.7	327	105.3
7	465	81.0	458	99.3	1,034	107.3	358	101.0	382	109.1	304	96.3	358	101.0	382	109.1	304	96.3
期計	1,734	82.6	1,946	94.5	1,034	107.3	1,526	95.6	1,539	96.8	299	99.3	1,526	95.6	1,539	96.8	299	99.3
8	407	56.5	472	103.6	969	78.9	365	104.2	370	101.4	303	101.4	365	104.2	370	101.4	303	101.4
9	670	115.5	492	98.6	1,147	87.6	384	100.0	381	98.4	303	101.4	384	100.0	381	98.4	303	101.4
10																		
11																		
期計																		
12																		
25.1																		
2																		
3																		
期計																		
年度計																		

(注) 1. 玄麦の買入・加工数量にはSBSでの買受分(19年度から)、大臣証明制度による輸出見返り分、納付金輸入分、民間流通麦及びその他国内産麦を含み、小麦粉の生産・販売量は、輸出分を除いた数量である。
 2. 「製粉・精麦工場需給実態報告」(生産局貿易業務課)による。
 3. 四捨五入の関係で内訳と計が一致しないことがある。
 4. 24年9月分は速報のため、選って訂正がある場合があります。

(単位：トン、金額：千円)

小麦加工食品の輸出の推移

区分 年月	小麦粉、小麦(ひき割、ミール、ペレット)			小麦粉調製品(ケーキミックスを含む)			マカロニおよびスパゲッティ			うどんおよびそばめん		
	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額
平成16年	108	-4.5	8,332,834	1,791	16.0	558,959	328	-20.0	45,188	7,719	17.3	2,008,637
17	110	-4.8	8,048,049	2,317	29.4	744,439	1,054	221.3	110,260	7,863	1.9	2,062,502
18	116	0.0	7,895,261	2,442	5.4	797,965	1,196	13.4	126,174	10,065	28.0	2,476,428
19	118	-11.9	7,725,611	3,151	29.1	1,043,144	1,150	-3.8	140,800	12,561	24.8	2,988,513
20	104	-26.8	8,338,085	3,377	7.1	1,242,742	743	-35.4	150,825	12,517	-0.3	3,227,623
21	93.5	-0.9	5,414,482	3,113	-7.8	1,150,484	822	10.6	150,825	11,947	-4.6	3,124,772
22	88	5.9	5,860,022	3,574	14.8	1,256,700	770	-6.3	139,835	12,492	4.6	3,214,545
23	191,480	-2.4	5,791,147	2,497	-30.1	917,040	607	-21.1	103,142	11,728	-6.1	3,005,454
24年1月	77	14.475	409,943	230	48.6	70,742	27	-44.6	4,911	693	-28.6	168,187
2	77	-13.5	458,367	174	-7.3	69,773	57	9.112	9,112	832	-10.3	218,111
3	81	1.1	512,385	243	15.7	82,578	49	-20.8	8,920	1,139	14.5	293,223
4	82	42.5	516,139	227	29.6	88,309	35	-3.8	8,240	979	10.4	251,276
5	80	13.4	494,231	136	7.9	60,991	46	-5.8	8,233	875	-3.8	225,974
6	79	-20.6	497,354	150	-29.2	53,654	61	122.4	9,665	969	13.3	256,348
7	79	14.9	500,257	142	-5.9	68,844	66	103.5	9,152	812	-19.1	222,949
8	78	8.7	515,552	132	-26.9	58,966	37	-50.2	8,082	922	2.0	249,518
9	18,230	-14.2	512,808	147	-21.9	55,466	74	60.4	10,563	958	-9.6	257,715
10												
11												
12												
24年1~12月計		150,085	4,417,036	1,583	-0.3	609,319	453	3.8	76,878	8,179	-3.9	2,143,301

区分 年月	ビスケット(スイート)			その他のベーカリー製品等			インスタントラーメン		
	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額	数量	前年増減率	金額
平成16年	108	-26.9	720,628	9,328	13.5	7,104,285	8,288	-5.2	2,847,158
17	110	-6.6	762,779	12,274	31.6	8,722,215	8,445	1.9	3,214,048
18	116	6.1	804,131	13,120	6.9	9,755,783	9,091	7.7	3,586,187
19	118	44.2	1,133,758	14,688	12.0	11,536,637	9,200	1.2	3,645,447
20	104	9.1	1,270,762	14,672	-0.1	12,115,107	8,120	-11.7	3,507,616
21	93.5	-26.1	993,506	11,972	-18.4	10,258,866	6,181	-23.9	2,919,649
22	88	10.0	1,067,436	13,343	11.5	11,770,935	5,981	-3.2	2,825,812
23	80	-28.4	801,032	11,967	-10.3	10,091,546	5,012	-16.2	2,146,062
24年1月	77	-11.5	57,338	826	-3.9	714,876	324	-21.2	135,296
2	77	-18.7	47,733	1,051	2.1	940,748	437	1.4	183,405
3	81	69.4	100,397	1,080	5.4	990,731	476	9.5	221,982
4	82	-5.7	61,210	1,162	39.6	1,026,360	443	55.3	200,095
5	80	101.5	65,620	1,155	80.8	1,016,057	478	27.3	199,919
6	79	2.1	48,571	1,194	19.1	1,031,938	557	28.0	247,793
7	79	41.0	66,823	1,190	22.0	986,388	472	-12.0	200,941
8	78	45.9	69,232	1,192	38.5	1,038,323	505	58.3	212,755
9	79	2.9	68,116	1,491	51.0	1,382,338	634	46.8	278,625
10									
11									
12									
24年1~12月計		585	585,040	10,341	25.9	9,137,762	4,326	18.2	1,880,811

(注) ①財務省貿易統計(全国分>品別国別表>輸出>月次)による。
②その他のベーカリー製品等は、スイートビスケットおよび米菓を除く焼菓子類並びにライスバーバー等をいう。

国際価格の推移

(単位：トン当たりドル、()内はブッシェル当たりドル)

品名	年	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
小麦 (シカゴ・SRW小麦No.2、 期近もの)	2004		(3.86)	(3.75)	(3.73)	(3.83)	(3.54)	(3.51)	(3.33)	(3.03)	(3.37)	(3.19)	(3.06)	(3.03)		
			142	138	137	141	130	129	122	111	124	111	124	117	112	111
			(2.98)	(3.00)	(3.68)	(3.09)	(3.06)	(3.23)	(3.49)	(3.16)	(3.23)	(3.16)	(3.23)	(3.39)	(3.07)	(3.19)
			109	110	135	114	113	119	128	116	119	116	119	125	113	117
			(3.29)	(3.52)	(3.62)	(3.50)	(4.00)	(3.62)	(3.66)	(3.77)	(3.93)	(3.77)	(3.93)	(5.43)	(4.82)	(4.94)
			121	129	133	129	147	133	134	138	144	138	144	199	177	182
			(4.64)	(4.55)	(4.61)	(4.88)	(4.97)	(6.07)	(6.02)	(6.97)	(8.46)	(6.97)	(8.46)	(9.53)	(7.78)	(8.55)
			170	167	169	179	183	223	221	256	311	256	311	350	282	314
			(9.32)	(9.43)	(10.93)	(8.96)	(7.76)	(8.77)	(8.11)	(8.25)	(7.27)	(8.11)	(8.25)	(5.56)	(5.34)	(5.20)
			342	378	426	329	284	322	298	303	267	204	196	204	196	191
			(5.69)	(5.36)	(5.44)	(5.22)	(5.78)	(5.75)	(5.35)	(4.82)	(4.71)	(5.05)	(4.82)	(5.05)	(5.39)	(5.37)
			209	197	200	192	212	211	196	177	173	186	177	186	198	197
(5.10)	(4.87)	(4.79)	(4.91)	(4.72)	(4.52)	(5.96)	(7.03)	(7.27)	(7.05)	(7.27)	(7.05)	(6.73)	(7.65)			
187	179	176	180	173	166	219	258	267	259	247	259	247	281			
(7.73)	(8.40)	(6.68)	(7.44)	(7.36)	(6.73)	(6.95)	(7.13)	(6.96)	(6.23)	(6.33)	(6.23)	(6.33)	(5.79)			
284	309	245	273	271	247	255	262	256	229	232	229	232	213			
(6.02)	(6.26)	(6.65)	(6.24)	(6.09)	(6.10)	(8.85)	(8.47)	(8.78)	(8.78)	(8.47)	(8.78)	(8.47)	(8.46)			
221	230	244	229	224	224	325	311	323	312	312	312	311				
(2.67)	(2.83)	(3.02)	(3.16)	(3.00)	(2.86)	(2.36)	(2.22)	(2.06)	(2.06)	(2.25)	(2.14)	(2.06)	(1.99)			
105	112	119	125	118	113	93	89	84	81	89	84	81	78			
(2.00)	(2.00)	(2.14)	(2.08)	(2.08)	(2.22)	(2.37)	(2.15)	(2.04)	(2.04)	(2.15)	(2.04)	(2.02)	(1.93)			
79	79	84	82	82	87	93	85	80	80	85	80	80	76			
(2.13)	(2.23)	(2.24)	(2.37)	(2.45)	(2.38)	(2.44)	(2.30)	(2.42)	(2.42)	(2.30)	(2.42)	(3.03)	(3.56)			
84	88	88	93	97	94	96	91	95	95	91	95	119	140			
(3.91)	(4.11)	(4.02)	(3.62)	(3.70)	(3.81)	(3.26)	(3.31)	(3.51)	(3.26)	(3.31)	(3.51)	(3.69)	(3.69)			
154	162	158	142	146	150	128	130	138	128	130	138	145	145			
(5.08)	(5.01)	(5.56)	(6.06)	(5.91)	(7.33)	(6.47)	(5.30)	(5.62)	(5.62)	(5.30)	(5.62)	(3.88)	(3.86)			
200	203	215	239	236	288	255	209	221	255	209	221	153	152			
(3.65)	(3.63)	(3.92)	(3.94)	(4.17)	(4.06)	(3.30)	(3.19)	(3.47)	(3.30)	(3.19)	(3.47)	(3.73)	(3.91)			
144	143	154	155	164	160	130	126	136	130	126	136	147	154			
(3.72)	(3.62)	(3.63)	(3.64)	(3.92)	(4.12)	(3.92)	(4.12)	(4.95)	(3.92)	(4.12)	(4.95)	(5.63)	(5.56)			
146	142	143	143	143	139	154	162	195	222	162	195	222	219			
(6.49)	(6.91)	(6.36)	(7.42)	(6.97)	(7.02)	(7.01)	(7.07)	(7.01)	(7.01)	(7.07)	(7.01)	(6.40)	(6.46)			
255	272	250	292	275	276	276	278	276	276	278	276	252	254			
(6.00)	(6.27)	(6.69)	(6.29)	(5.97)	(5.80)	(7.77)	(7.94)	(7.48)	(7.77)	(7.94)	(7.48)	(7.37)	(7.21)			
236	247	263	248	235	228	306	313	294	306	313	294	290	284			

(注) 1. 小麦は、シカゴ相場による月央の終値である (2012年11月分は11月15日)。
 2. とうもろこしはシカゴ相場による月平均価格である。

輸入食糧小麦の入札結果(港湾諸経費を除く)の概要

(単位：トン、円/ドル当たり)

入札月および積月		平成24年1月入札分 (積月：3月積み)			平成24年2月入札分 (積月：4月積み)			平成24年3月入札分 (積月：5月積み、6月到着)			平成24年4月入札分 (積月：6月積み、7月到着)			平成24年5月入札分 (積月：7月積み、8月到着)		
産地	銘柄	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格
アメリカ	WW	73,185	22,405	23,525	56,035	24,273	25,487	68,262	26,340	27,657	50,850	25,953	27,251	65,868	24,607	25,837
	SH	96,900	25,043	26,295	56,492	26,626	27,957	71,301	28,887	30,331	73,629	26,998	28,348	78,823	26,039	27,341
	DNS	105,675	31,174	32,733	72,887	31,903	33,498	79,729	34,879	36,623	131,459	33,119	34,775	115,914	31,105	32,660
	小計	275,760	26,692	28,027	185,414	27,989	29,388	219,292	30,273	31,787	255,938	29,934	31,431	260,605	27,930	29,327
カナダ	1CW	105,580	31,257	32,820	92,262	32,349	33,966	73,996	34,318	36,034	74,298	33,620	35,301	84,704	30,721	32,257
	小計	105,580	31,257	32,820	92,262	32,349	33,966	73,996	34,318	36,034	74,298	33,620	35,301	84,704	30,721	32,257
オーストラリア	ASW	93,365	23,618	24,799	54,224	26,784	28,123	72,289	27,285	28,649	60,324	26,081	27,385	68,950	25,684	26,968
	小計	93,365	23,618	24,799	54,224	26,784	28,123	72,289	27,285	28,649	60,324	26,081	27,385	68,950	25,684	26,968
計		474,705	27,103	28,458	331,900	29,004	30,454	365,577	30,501	32,026	390,560	30,040	31,542	414,259	28,127	29,533

入札月および積月		平成24年5月及び6月入札分 (積月：8月積み、9月到着)			平成24年6月及び7月入札分 (積月：9月積み、10月到着)			平成24年7月及び8月入札分 (積月：10月積み、11月到着)			平成24年9月入札分 (積月：11月積み、12月到着)			平成24年10月入札分 (積月：12月積み、1月到着)		
産地	銘柄	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格	数量	落札価格 (加重平均) ※税別	※左の税込み 価格
アメリカ	WW	80,290	24,435	25,657	59,378	29,682	31,166	61,840	31,080	32,634	48,320	30,689	32,223	62,953	30,390	31,910
	SH	77,140	25,829	27,120	71,585	31,583	33,162	75,710	32,923	34,569	70,474	33,056	34,709	78,687	32,883	34,527
	DNS	123,828	29,914	31,410	124,714	34,727	36,463	122,338	34,675	36,409	82,734	34,474	36,198	98,154	34,420	36,141
	小計	281,264	27,230	28,592	255,677	32,675	34,309	259,888	33,309	34,974	201,528	33,071	34,725	239,794	32,858	34,501
カナダ	1CW	48,786	31,173	32,732	80,431	28,398	29,818	85,312	35,937	37,734	77,577	33,869	35,562	101,398	33,326	34,992
	小計	48,786	31,173	32,732	80,431	28,398	29,818	85,312	35,937	37,734	77,577	33,869	35,562	101,398	33,326	34,992
オーストラリア	ASW	74,465	25,223	26,484	60,175	30,910	32,456	58,950	32,569	34,197	59,445	31,698	33,283	60,377	32,276	33,890
	小計	74,465	25,223	26,484	60,175	30,910	32,456	58,950	32,569	34,197	59,445	31,698	33,283	60,377	32,276	33,890
計		404,515	27,336	28,703	396,283	31,539	33,116	404,150	33,756	35,444	338,550	33,013	34,664	401,569	32,889	34,533

(注) 上表の詳細は、農林水産省ホームページ「申請・お問い合わせ」を参照し、次に「調達・入札」の「調達情報・公表事項」を参照して、「契約情報公表」を参照し、「食料安定供給特別会計」を参照し、「アドレス」[http://www.maff.go.jp/i/supply/kouhyou/keiyaku/kyokyu.html]、「米管理動定・麦管理動定」、「米管理動定」の「一般競争入札・指名競争入札(物品役務等)」を参照して輸入小麦に該当する箇所をご覧ください。
(資料：農林水産省総合食料局(食糧貿易課))



■資料 ★★★

2 平成24年産小麦の秋まき、春まき別作付面積(北海道・子実用)

区 分	作付面積	前年産との比較	
		対 差	対 比
	ha	ha	%
小 麦	119,200	0	100
秋まき小麦	107,500	△2,600	98
春まき小麦	11,700	2,580	128

[累年データ]

小麦の作付面積(子実用)の推移

(単位：ha)

区 分	小 麦		
	全国	北海道	都府県
平成15年産	212,200	112,700	99,500
16	212,600	114,000	98,600
17	213,500	115,500	98,000
18	218,300	120,500	97,700
19	209,700	117,100	92,600
20	208,800	115,700	93,100
21	208,300	116,300	92,000
22	206,900	116,300	90,600
23	211,500	119,200	92,300
24(概数)	209,200	119,200	90,100

資料：農林水産省大臣官房統計部『耕地及び作付面積統計』

—「ソフト＆ハード」(読者の欄)への投稿のお願い—

読者の皆様、当振興会の広報誌「製粉振興」の内容を、より親しみのもてるものにするために、次のような内容の投稿をお待ちしていますので、記事をお寄せ下さい。

また、この広報誌の内容の充実を図っていきたくて考えていますので、ご意見等がございましたらお寄せ下さい。

- ・テーマは、小麦や小麦粉製品についての随想、紹介等と考えていますが、小麦と関係のない趣味などの話でも結構です
- ・投稿者名は実名でも筆名でも結構です
- ・長さは1,200字程度(1頁)とします
- ・掲載分には薄謝を進呈します



「コナちゃん」

(マスケットの小麦粉の精)

★ 編集後記

- 2010年頃から総人口の減少が始まった。2012年から団塊の世代が65歳を超え始め、高齢者人口は2010年の2,925万人から2020年には3,623万人へ増加するようだ。現在の総人口は1億2,753万人、65歳以上は3,074万人(約24%)。70歳以上は2,256万人、75歳以上は1,517万人、80歳以上は893万人、85歳以上は430万人、100歳以上は5万人超である。高齢化社会の将来は平均年齢が更に上がるが、平均寿命も延びるのだろうか。
- ところで高齢化社会は総人口の減少、生産労働力の減少、消費経済の縮小等が社会の活力を縮小させ問題となるのだが、食品部門では若年と老年では食物の摂取量に差があり、全体は縮小すると見られている。しかし、経済的な視点では、量の減少を付加価値で補うことも可能ではないか。地産地消のように地域を限定すると、古くからの地元食品業者は地域住民の好み等を熟知しており、的確な食材提供が出来るのが強みだと言う。輸入品に比べ価格は高いが、生産者が見える安心感と圧倒的な鮮度により売れており、将来は地元業者、メーカーと消費者が共存共栄できる健康長寿社会の可能性もあると言われている。一方で、地産地消は昔からの食材で料理の形態が定型化している。したがって、新しい食べ方を提案し、消費の拡大を図ることが必要だとも言われている。
- 政権交代直後、突如として沸いた「TPP」に関する問題、3年間で過ぎた。その間に、東日本大震災の発生と原子力発電所問題等により話題の中心から遠のいた。その後政府において検討、対応が固まったなどとの話は耳にしていない。そして、またまた「TPP」は表に出てきた。今回は選挙の争点になろうとしている。国内産業の将来展望は大丈夫だろうか。「麦ビジョン」の検討は進展していくのだろうか。気になるところです。

小麦粉は 豊かな食事の コンダクター

あなたの豊かな食生活のために

週末も **パン** を囲んで楽しい団欒 たんらん

さそいあい、いつでも、どこでも、**うどん・そば**

インスタントラーメン
は世界の食文化

希望の一日は **ホットケーキ** から

麺 には旬の味、春・夏・秋・冬

家族で楽しい、みんなでおいしい
ピスケット

パスタ なら父さんも、私も、僕も三ツ星級

パン粉 がきめて、おいしいコロッケ・とんかつ

てんぷら・ギョウザ
ムニエル はわが家の味

現代に生かそう伝統食品 **焼麩** に **生麩**
やきふ なまふ

(財)製粉振興会
全国小麦粉実需者団体協議会
製粉協会・(協)全国製粉協議会

製粉振興 11月号 (No.551)

発行／平成24年11月20日

編集発行人／落合通人

発行所／財団法人 製粉振興会

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町15番6号
製粉会館2階

Tel. (03) 3666-2712 (代表)

<http://www.seifun.or.jp>

Fax.(03) 3667-1883

E-mail:seifunshin@mri.biglobe.ne.jp

禁無断転載